

□研究資料□

スタンドアップパドルボード (SUP) の活動環境における実施者の配慮行動と保全意識
ーインストラクター養成講習会参加者を対象にー平野貴也¹¹ 公立大学法人 名城大学

海洋人間学雑誌, 9(1):10-16, 2020.

(受付: 2019年4月3日; 最終稿受理: 2019年10月25日)

キーワード: 研修, スタンドアップパドルボード, 環境配慮行動, 環境保全意識, 活動環境

I. はじめに

1. SUPについて

近年、我が国は多様なライフスタイルの選択が可能な社会と言われている。さらに多様化する価値観、長期化するライフサイクルなどの影響もあり、自由時間を充実させたいというニーズが高まることで、アウトドアスポーツは広がりを見せている。スポーツ庁は、2017年度の重点課題としてアウトドアスポーツを設定し、アウトドアスポーツ推進宣言を行った。その中で、豊かな人生の時間をもたらし、自然資源を活用した地域活性化、交流人口の拡大、周辺産業の活性化の推進など、スポーツの枠を超えてアウトドアスポーツが人々や社会に与える好影響は地域活性化の起爆剤ととらえている。また原田²⁾は、我が国は自然環境の豊富さからアウトドアスポーツの宝庫であり、特にマリンスポーツについては、ダイビングの対象資源としての「海底観光資源」が豊富であり、ホエールウォッチングやドルフィンセラピーなどの鑑賞・体験型、シーカヤックやサーフィンなどが楽しめるスポーツイベント型の「海域観光資源」を持つ海洋観光の資源大国であると述べるなど、今後の我が国のアウトドアスポーツおよびマリンスポーツのさらなる可能性に期待がもたれている。

本研究のテーマであるスタンドアップパドルボード(以下 SUP と表記する)は、水に浮かんだボードの上に立ち、シングルブレードのパドル(水を漕ぐ櫂が一つ)を漕いで進むアウトドアスポーツであり、スタンドアップパドルボーディング、スタンドアップパドルサーフィンなどと呼ばれている。2005年頃に我が国で専用の用具の販売が始まり、2012年に日本スタンドアップパドルボード協会(以下 SUPA と表記する)が設立された。2012年に約80名であった協会会員数は、2018年には約10倍の830名に増加した。また国内のアクティビティや文化体験の予約プラットフォームであるACTIVITY JAPAN(アクティビティジャパン)の調査において2018年の夏休みに最も人気のアクティビティ種目となるなど急速に国内に普及したアウトドアスポーツである。

立って操作することを前提としたバランスの良い専

用の用具が製品イノベーションによって開発されたことが急速な普及の要因あり²⁾、サーフィンやウインドサーフィンと比較して手軽で、初心者でもすぐに漕げるようになることが特徴である。また SUP を漕ぎながら波に乗る「SUPサーフィン」、釣りをする「SUPフィッシング」、ボードの上で身体運動を行う「SUPフィットネス」や「SUPヨガ」、川を下る「リバーSUP」など競技やレクリエーションとしての活動が行われている。競技会、インストラクター制度、技能検定などの整備が進み、2018年には国内で300以上のイベントが開催されており、活動内容や活動エリアが多様化している。ただ近年、漂流事故や衝突事故が発生しており、対策が望まれている。海上保安庁はホームページの「海の安全情報」に SUP に関する情報を示し、装備、活動環境、出艇前の確認事項を記載している³⁾。また2018年に発生したカヌー及びSUP中の事故の約7割が経験年数3年以内の初心者であることから、各条件下における初心者及び熟練者の違いを比較検討し、活動環境に関するセーフティガイドを示している。さらに同庁は2018年、2019年とカヌー及びSUPの安全対策に係る意見交換会を開催し、安全な航行技術と実施方法の検討、検証実験を実施するなど、安全な活動環境に関して検討がなされてきている。

2. SUPの実施環境・活動環境について

SUPに関する学術的な研究は少なく、河合⁴⁾はアメリカにおける普及の状況と我が国の初期の普及状況を比較し、我が国での普及の可能性を示唆している。平野²⁾は安全指導者養成、用具の価格や保管などに加え、実施環境の整備を SUP 普及の課題として挙げている。また平野⁵⁾の研究は SUP 実施者を対象に調査を行い、SUPの実施環境を用具、競技、活動環境、指導・安全、情報・促進の5つに分類した。またそれらの実施環境を評価する因子として継続環境因子と導入環境因子の10項目を作成した。さらに実施環境の満足度は活動満足度と相関があり、活動満足度は継続意図および推奨意図と関連があり、今後、SUPが国内でさらに普及するためには、実施環境の整備が必要であるという課題を提示した。ただ同時に、SUPの実施環境が多岐にわたるため、幅広い概念を10項目で網羅するには限界があり、環境を限定するか、尺度を増やす必要性を指摘し

筆頭者連絡先: 〒905-8585 沖縄県名護市為又 1220-1
e-mail: t.hirano@meio-u.ac.jp

た。平野⁵⁾の示した SUP の実施環境には競技や用具などが含まれている。これらの環境整備には競技団体や用具製造販売業者の協力が必要であり、SUP 実施者が容易に影響を及ぼすことのできる環境とは言えない。そこで本研究では SUP 実施者が実際に活動する環境に限定する。つまり、海の状況や用具の良し悪しなどの環境要因は除き、水面に立ってパドルを漕ぐ行為とそれに伴う行為が影響を及ぼす環境を SUP の活動環境と定義して研究を進める。

3. 環境配慮行動と保全意識について

Pfahl⁶⁾は、多くのスポーツが直接的もしくは間接的に、自然環境へ影響を与えていることを報告している。レクリエーション研究が盛んな欧米では、登山者とライダーの衝突に関する研究や MTB (マウンテンバイク) によるトレイル浸食を科学的に評価する研究、林道の許容限界に着目した持続的な管理策の研究などが行われており、MTB やライダーの特性を把握した上で、自然地域の計画・管理について議論がなされている。環境問題が注目される現代社会では活動環境を保全するには行政だけでなく、利用者、活動者の協力が不可欠であるが、我が国ではレクリエーション・スポーツ参加者の環境意識に関する研究は、ほとんど行われていない現状にある。近年のレジャーの多様化、レジャー人口の増加によって、良質な自然環境には実施者が多数押し寄せており、自然環境に与える影響が危惧されている。また、レジャー・スポーツの需要拡大がごみや騒音、違法駐車、排気ガスなど地域環境に与える影響についても検討がなされなくてはならない。たとえば、アウトドアスポーツのトレンドとして近年注目を集めるトレイルランニングにおいては、一般ハイカーや登山者との接触事故や大会中の死亡事故、自然保護団体の反対により、中止に追い込まれるイベントも少なくない。実施者の環境行動や環境への配慮はアウトドアスポーツが普及する上での必修の課題であり、特に SUP は手軽な反面、漂流や衝突事故、漁業者や他のレジャー愛好者とのトラブルなどが報告されており、早急な対策が望まれる。

平野²⁾は SUP 実施者の 29.7% が独学で SUP を始めており、SUP の普及が初期段階にあるとした。さらに普及を促進するためには安全対策、ルールの周知、指導者の育成、他の競技団体との関係調整などの環境整備を指摘している。SUP に関する指導書は国内では市販されておらず、インターネットのコンテンツも散見される程度で多くないのが実情であり、参加者がどのように SUP を実施するのに必要な知識と技能を入手しているのか疑問が持たれた。SUP を統括する団体は競技や活動内容によってさまざまに分化しているが、日本スタンドアップパドルボード協会 (以下 SUPA と表記する)、日本スタンドアップパドルボード指導者協会 (SIJ)、日本 SUP ヨガ協会、日本ウオーターフィットネス協会などでは指導法の確立やインストラクターの養成を目的に指導者養成の講習会を開催している。講習の内容は技術面、安全面、教授法、スクールの運営、気象海象など多岐にわたり、他のレジャー・スポーツ実施者への配慮、漁業従事者への配慮、混雑時などの対処など活動環境への配慮に関する内容が含まれていたが、講習内容、講習時間ともにわずかであった^{7,8)}。それに

対し、カヌーやスクーバダイビング、エコツアーなど自然を活用して実施する他のレジャー・スポーツの指導者養成講習会などでは活動環境への配慮、環境保全などが単元として取り入れられているケースが見られる。

我が国でさらに SUP 実施者が増え、レジャー・スポーツとして普及していくためには安全で、円滑な活動ができるように環境を整備する必要がある。まずは実施者自身が安全対策、自然や地域への配慮などの知識と技能を習得できるように、その周知方法や指導方法を構築しなければならない。ただ SUP 実施者が活動環境に対し、どのような保全意識を持ち、どのような配慮行動を行っているか明らかでない。そのため実施者の実情を知り、活動環境に関する指導や教育を進めていく方を検討する必要がある。

II. 目的

本研究は SUP 活動における環境配慮行動を構成する要因を明らかにし、環境配慮に関する知識技能の入手先および活動内容による環境配慮行動の違いを明らかにする。また環境保全意識について調査し、SUP 実施者の環境配慮行動および環境保全意識を促進するための方策を提案することを目的とする。

III. 方法

1. 調査対象者

本研究では SUP 指導者を目指すインストラクター養成講習会への参加者を対象とした。インストラクター養成講習会への参加者は、これから SUP 指導者を目指す者であるが、講習会への参加資格が SUP 活動 3 年以上であり、十分に環境への配慮および意識を判断できる対象者である。

2. 調査方法

2016 年 3 月～2017 年 6 月に九州、関西、関東、東日本の各地区で開催された SUPA 公認ベーシックインストラクター認定講習会において調査用紙を配布し、その場で回収を行った。300 票配布し、有効回収数は 211 票、有効回収率は 70% であった。

3. 調査内容

A. 専門的属性

個人的属性 4 項目 (性別・年齢・居住地・職業)、専門的属性 (活動年数、活動頻度、主な活動内容、技術レベル (自己申告)、環境配慮に関する知識と技能の入手先、指導経験の有無) の 6 項目について調査を行った。

B. 環境配慮行動

本研究では活動環境を実施者が実際に活動する環境に限定するために、調査用紙の教示文には「SUP を実施する場所の自然、施設、地域における環境 (海の状況、用具などの良し悪しなどの環境は除く) についてお聞きします」と記載した。環境配慮行動については平野⁴⁾が作成した SUP 参加者の実施環境を評価する尺度 (10 項目) をもとに、SUPA 理事 3 名とレジャー・スポーツに関する研究者 3 名によって項目を吟味し、改編を行った。その結果、新たに項目を追加し、12 項目を作成した。質問項目には、「あなたが SUP をするときに以下のことをどの程度、行っていますか?」と記載し、「い

つも行っている」から「全く行っていない」の6段階尺度を用い、等間隔尺度を構成するものと仮定し、6点から1点の得点を与えた。

C. 環境保全意識

環境保全意識については武⁹⁾が作成したマウンテンバイク活動者を対象とした環境保全意識に関する3項目を援用した。SUP活動に当てはまるように表現を修正し、5段階尺度を使用して評価を求めた。さらにSUPを実施する際に必要性を感じた環境保全行動について自由記述によって回答を求めた。

D. 分析方法

環境配慮行動の規定要因を探るため、環境配慮行動に対する評価項目について探索的因子分析を行った。SUP活動に関する環境配慮について学んだ先を独立変数、探索的因子分析によって抽出された環境配慮行動因子を従属変数に設定し、一元配置の分散分析および多重比較分析を行った。分析にはIBM SPSS 25.0 for Windowsを用いた。

E. 倫理的配慮

講習会主催団体であるSUPAに、調査主旨、調査方法、調査内容、倫理的配慮について説明を行い、調査実施の承諾を得た。また調査への協力は自由意志であること、回答しなくても不利益は生じないこと、データは個人が特定されることがないように処理すること、データの管理は厳重に行うことを調査用紙に明記した。さらに調査の実施に際しては、調査者が事前に口頭で回答者に説明を行い、回答を持って同意したとみなした。

IV. 結果及び考察

1. 属性と専門的属性

対象者の性別は、男性が約8割であり、22歳から59歳に分布し、平均年齢は40.3±11歳であった。居住地は関東地方が20.4%と最も多かったが、全国6地域を網羅していた(表1参照)。

表2より活動年数は3年から10年に分布し、平均4.01±1.5年であった。定期的な活動が行われており、週に1日から3日活動する者が81%であった。主な活動内容は①レース型25.6%、②サーフィン型23.7%、③クルージング型40.7%、④ヨガ・フィットネス型10%の4つに分類された。今回の調査では主となる活動の一つだけ回答することを求めたが、対象者の75.6%は「複数の活動を並行して行っている」と回答しており、レースとサーフィン、サーフィンとヨガなど海のコンディショニングや活動の目的によって多様な活動を行っていることがわかった。環境配慮に関する知識と技能の入手先については「経験者から」が40.3%と最も多く、他のレジャー・スポーツで得た知識と技能の応用である「他種目から応用」が22.3%であった。専門店のSUP教室である「スクールで」は15.6%と最も低かった。独学の者は21.8%と平野²⁾の先行研究と比較して約8%の減少であった。SUPの手軽さは実施者の増加につながっているが、危険を伴う水辺でのレジャー・スポーツでもあり、他の種目の応用や経験者から伝えられる

表1. 属性

項目	カテゴリー	度数(人)	割合(%)
性別	男性	167	79.1
	女性	44	20.9
年齢	20代	23	10.9
	30代	82	38.9
	40代	83	39.3
	50代	23	10.9
居住地	東北・北海道	27	12.8
	関東	43	20.4
	中部	36	17.1
	関西	29	13.7
	中国・四国	41	19.4
	九州・沖縄	35	16.6
職業	会社員	101	47.9
	公務員	21	10.0
	自営業	65	30.8
	パート	17	8.1
	専業主婦	2	.9
	その他	5	2.4

表2. 専門的属性

項目	カテゴリー	度数(人)	割合(%)
活動年数	4年未満	99	46.9
	4年以上～6年未満	83	39.3
	6年以上	29	13.8
活動頻度	月3回未満	16	7.6
	週1回	89	42.2
	週2～3日	82	38.9
	週4～5日	13	6.2
	週6～7日	11	5.2
技術レベル (自己申告)	初級者	86	40.7
	中級者	105	49.8
	上級者	20	9.5
主な活動	クルージング	86	40.7
	レース	54	25.6
	サーフィン	50	23.7
	ヨガ、フィッシング	21	10.0
環境配慮に関する知識技能 の入手先	経験者から	85	40.3
	他種目からの応用	47	22.3
	独学	46	21.8
	SUPスクールで	33	15.6
指導経験 (報酬あり)	なし	135	64.0
	あり	76	36.0

だけではなく本来は専門店で専門的な知識と技能の習得が必要である。近年、急速にSUP実施者が増加したことの証左ではあるが、専門店のスクールで技術を学ぶというスタイルが定着していない実情にある。今後、指導者養成講習会や資格制度が整備され、指導者資格を持つ者が増加することで、専門店のSUPスクールにおける指導活動が活発になり、SUPの初期指導を受ける場所として定着することが望まれる。

また今回の調査は、これからインストラクター資格を取得しようとする者を対象としたが、内36%は有償

での指導経験があった。養成講習会を受講し、資格を取得し、その知識と技能を発揮して SUP スクールなどで指導を行うのが本来の順序であるが、指導や業務を行う上で資格取得が必要となったため資格取得を目指しているものと推測される。指導者資格や指導団体の指導制度が構築されていく途上であると考えられる。

2. 環境配慮行動

活動環境への配慮行動の各項目は「SUP をするとき、地域住民や他の海面利用者に配慮するように働きかけている」5.01 点、「地域住民や他の海面利用者に配慮して SUP をしている」4.85 点、「水や大気を汚染しないように SUP をしている」4.84 点の平均得点が高かった。因子分析を適用するにあたり、まず平均と標準偏差から天井効果が見られた 4 項目を分析から除外した。次に主因子法 Promax 回転による探索的因子分析を行った。その結果、固有値 1.0 以上の因子は 3 因子であった。そのうち、いずれの因子の負荷量においても 0.4 以下であった 1 項目を除き、最終的に表 3 に示した 3 因子が抽出された。

第 1 因子では水、大気、海岸、生物の項目で構成されており「自然環境」因子と命名した。第 2 因子は他の海面利用者、駐車マナーなど SUP 活動を行う上で関係する地域への配慮行動に関する項目であり「地域環境」因子と名付けた。第 3 因子は環境への配慮に対する他の人への働きかけ行動であり、「働きかけ」因子と命名した。

3 因子の累積寄与率は 61.36 であり、この 3 因子でもって SUP を実施する際の活動環境への配慮行動の約 6 割を説明している。因子間の相関は .38～.58 間での値を示し、すべての因子間に 1%水準の正の相関が見られた。これは環境配慮の行動が相互に関係していることの反映であると考えられる。クロンバックの α 係数は .70 から .75 を示しており、高くないが内的信頼性が確認できた。

対象者が指導者になることを目指していることもあり、環境配慮行動に対する得点は全体的に高かった。表 4 より下位尺度得点の平均は「働きかけ」因子が 4.92 と最も高く、「自然環境」因子が 4.64 と低かった。環境配慮行動因子と環境配慮に関する知識と技能の入手先の差異について対応のない一元配置の分散分析を行った結果、地域環境因子 ($p<0.05$) と働きかけ因子 ($p<0.05$) に有意な差が見られた。Bonferroni 法による多重比較では、地域環境因子では①独学の者よりも②経験者からの者の平均得点が高く、「働きかけ」因子では①独学の者よりも④他の種目の経験から得ている者の平均得点が高かった。水辺では明文化されていない活動場所独自のマナー、邪魔にならない駐車場所などその場で活動している者でないとわからない配慮も多々ある。SUP 経験者はこれから SUP を開始しようとする者に知識と技能を伝達する役割を行っていた。平野²⁾ は 70%以上の SUP 実施者が他のレジャー・スポーツ種目から SUP に移行したり、サーフィンやカヌーなどと並

表 3. 活動環境配慮行動尺度の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

質問項目	Mean	SD	因子負荷量			共通性
			F1	F2	F3	
F1: 自然環境($\alpha = .72$)						
水や大気を汚染しないようにしている	4.84	0.92	.78	.10	-.06	.62
海や海岸に落ちているごみを拾うようにしている	4.72	1.07	.55	.08	.24	.28
鳥や魚などの生物に影響がないようにしている	4.25	1.21	.49	-.03	.09	.57
F2: 地域環境($\alpha = .70$)						
ゲレンデの使い方や駐車マナーなど配慮している	4.80	0.98	-.10	.87	.19	.95
地域住民や他の海面利用者に配慮している	4.85	1.00	.19	.59	-.19	.29
F3: 働きかけ($\alpha = .75$)						
地域住民や他の海面利用者に配慮するよう仲間に働きかけている	5.01	0.95	-.02	.18	.79	.84
自然環境に影響を及ぼさないように仲間に働きかけている	4.64	1.08	.24	-.17	.66	.52
因子間相関						
	F2		.380**	—	—	
	F3		.578**	.571**	—	
** $p < 0.01$						

** $p<0.01$

表 4. 環境配慮行動と環境に対する知識や技能の入手先

	全体 (n=211)		①独学で (n=46)		②経験者から (n=85)		③スクールで (n=33)		④他種目の 応用 (n=47)		自由度 =3	Bonferroni	
下位尺度因子	Mean	S D	Mean	S D	Mean	S D	Mean	S D	Mean	S D	F 値	有意水準	多重比較
自然環境	4.64	0.92	4.76	1.19	4.62	0.79	4.67	0.90	4.27	0.74	1.90		
地域環境	4.75	1.00	4.30	1.06	5.01	1.03	4.83	1.05	4.65	0.92	2.80 *		①<②
働きかけ	4.92	0.90	4.57	0.98	4.86	0.83	4.86	1.00	5.23	0.85	2.94 *		①<④

* $p<0.05$

行して実施していることを明らかにしている。他種目での活動によって得られた環境に配慮する知識と技能は SUP に応用できており、他の実施者や地域との関係づくりに対する環境配慮に対する働きかけに活用されていることがわかった。なお環境配慮に関する知識と技能を独学で学んだ者の入手先ではインターネット、雑誌、DVD などが多数であった。こうした情報よりも経験者の口コミや自らの経験による情報が SUP 実施に活用されていたが、SUP 指導団体は環境に配慮する基本的な行動を記載したマニュアルを作成し、実施者への配布やホームページで公開して啓蒙を図る必要がある。

一方、スクールで学んだ者の平均得点は全体の平均値よりは高値ではあったが、有意な差は見られなかった。SUP を始めようとする者の窓口となるべき SUP スクールはさらに積極的に活動環境への配慮を指導するべきであろう。スクールで指導するインストラクターが養成される場である指導者講習会等で環境への配慮、関係作りなどについて事例を挙げて、より具体的に指導を行うことがスクールでの実施環境に対する配慮や行動の指導をより促進するものと思われる。

環境配慮行動因子と活動内容の差異について一元配置の分散分析を行った結果、「自然環境」因子に有意な差 ($p<0.05$) が見られた (表 5 参照)。Bonferroni 法による多重比較では、クルージング実施者よりもレース実施者の平均得点が有意に高かった。クルージングは自然や地形などを観察する活動が主であり、自然環境への配慮行動は高いと予測されたが、最も低い得点であった。レース活動を行っている者はチームや仲間と時間を合わせて活動を行っていることが多く、海上のゴミを集めるなどの清掃活動を行っているチームも見られる。またトレーニングとして長い距離を漕ぐため、鳥や魚の群れなどと遭遇することもあり、自然環境への配慮行動に結びついていると考えられた。武^{9,10)}は、指導的立場にあるガイドや野外レクリエーションを長期に実践している者は環境の保全意識や配慮行動が高くなること示唆しているが、SUP 実施者には性別、年齢、活動年数、指導経験の有無による環境配慮行動への影響は見られなかった。ただ対象者が指導者になることを目指していることもあり、環境配慮行動に対する得点が全体的に高く、これらによる差異が大きくなかったとも考えられる。また対象者の平均活動年数が 4.0 ± 1.5 年と少なく、それほど指導経験が豊富ではなかったことも一因であったと考えられた。

なお Dyck ら¹¹⁾は、登山愛好者を対象に、自然環境への態度や行動について検証を行い、専門志向化が高い愛好者は、中・初級の登山愛好者に比べて環境に負荷の少ない登山行動を行っていることを明らかにしている。レース、サーフィン、ヨガ・フィットネスなどはク

ルージングと比較して専門的な知識と技能が必要である。経験年齢と活動内容の間に相関は見られなかったが、クルージングからレース活動への移行や専門志向化をたどる過程で指導者や経験者などから環境配慮に関する知識や技能を学び、行動に結びついたことも推測される。快適で利便性の高い活動環境を構築するには実施者の専門化の程度や活動内容に合わせて活動環境を整備する必要がある。同時に、活動場所が許容できる他の水辺レジャー・スポーツを含め容量の基準や混雑状態 (Crowding) に対するルール作りが必要であると考えられる。

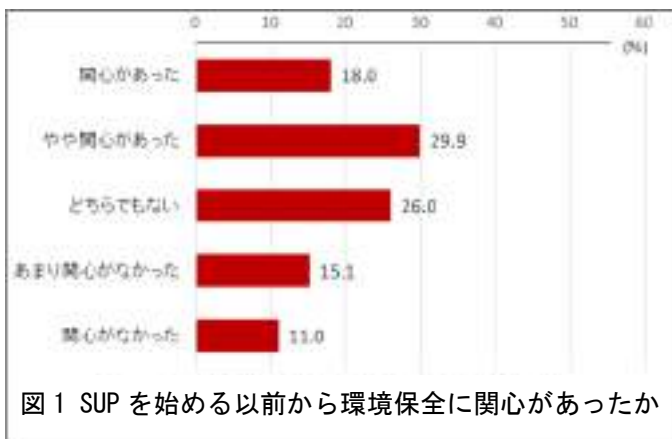


図 1 SUP を始める以前から環境保全に関心があったか

3. 活動環境への意識

A. 環境保全への意識について

「SUP を始める以前から環境保全に関心があったか」の項目で「関心があった」と「やや関心があった」と回答した者は 47.9%であり、「関心がなかった」と「あまり関心がなかった」の合計は 26.1%であった (図 1 参照)。

次に「SUP を通じた活動で環境保全に対する意識が高まったか」の項目では「高まった」と「やや高まった」を合わせて 78.7%であった。「あまり高まらなかった」「高まらなかった」は 4.8%であり、SUP 活動によって環境保全に対する意識の変化が見られた。「SUP を通じた活動で環境保全の必要性を感じたか」の項目では 90%の者が必要性を感じており、「あまり感じない」「感じない」は 2%であった。SUP を実施することによって環境保全に対する意識が影響を受けていることがわかった (図 2・3 参照)。

調査方法が異なるため一概に比較することはできないが、武¹⁰⁾のカヌーイストの環境保全意識調査と比較すると、カヌーイストはカヌーを始める前からの環境保全への関心があった者は 51.4% (「とても当てはまる」と「当てはまる」の計) であり、SUP 実施者の方がより少ない割合であった。カヌーを行うことで関心が高

表 5. 環境配慮行動と活動内容

下位尺度因子	全体 (n=211)		①レース (n=54)		②サーフィン (n=50)		③クルージング (n=86)		④ヨガ・フィッシング (n=21)		自由度 =3	Bonferroni 有意水準	多重比較
	Mean	S D	Mean	S D	Mean	S D	Mean	S D	Mean	S D			
自然環境	4.64	0.85	4.96	0.91	4.64	0.78	4.44	0.86	4.78	0.65	2.82 *	③<①	
地域環境	4.75	0.86	4.89	0.89	4.73	0.93	4.63	0.82	4.69	0.81	1.12		
働きかけ	4.92	0.78	5.00	0.84	4.98	0.79	4.90	0.78	4.67	0.58	1.11		

* $p<0.05$

まったカヌーイストは 66%、必要性を感じた者は 82.3%であり、この 2 項目は SUP 実施者の方が高い割合を示した。活動中の視点が高く、移動しながら水中や水辺を観察しやすい SUP の特性が環境保全に対する意識を高めていると思われる。SUP を行うことで環境保全に対する意識が高まっており、自然環境の保護や環境保全など環境教育のツールとしても活用できるのではないかと推測された。

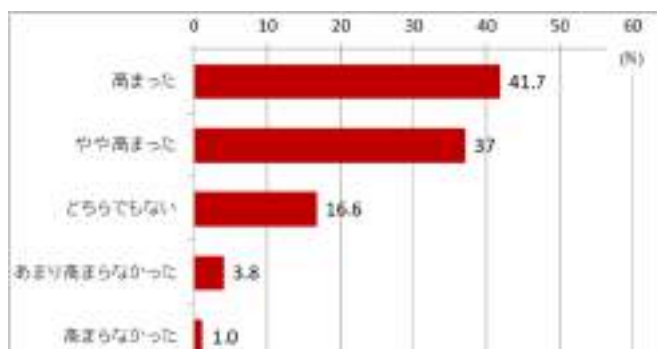


図 2. SUP を通じた活動で環境保全に対する意識が高まったか

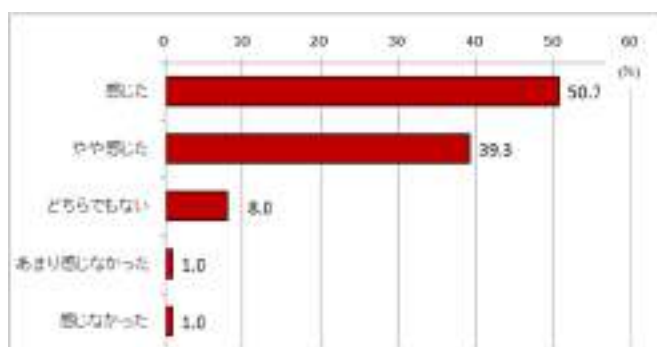


図 3. SUP を通じた活動で環境保全の必要性を感じたか

B. SUP を実施する際に必要性を感じた環境保全行動

SUP を実施する際に必要性を感じた環境保全の対策や整備について自由記述で回答を求め（長文での回答は文意によって区切り、複数の回答とした）、得られた回答をグルーピングした結果を図 4 に示した。水辺利用者との関係 30.3%（64 件：他のレジャー実施者、漁業者との関係づくりなど）、不法投棄・ゴミ 28.9%（61 件：大型ゴミ、ビニールゴミの漂着対策など）、地域住民との関係 28.4%（60 件：駐車場整備、騒音など）、砂浜保護 22.3%（48 件：砂の流出、サンゴ保護など）、野生生物 19.4%（41 件：生態、観察方法を知るなど）、水質汚染 19%（40 件：水質、におい対策など）などが見られた。地域環境に関する回答が上位であり、自然環境に関する回答も多数見られた。これらの回答数に属性、専門的属性によるグループ間の差異は見られなかった。

SUP を行うことで、これらの活動環境の問題点に気づき、整備や改善の必要性を感じている。さらに環境配慮行動では「働きかけ」因子など環境配慮に対する働きかけ行動がみられることから、特に本研究の対象者である指導者を志す実施者は環境保全に対する知識と技能を得ることで環境保全を促進する担い手となる可能

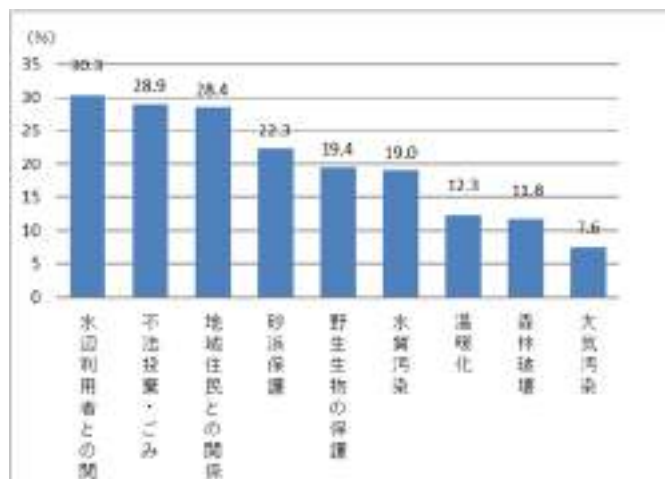


図 4. SUP を実施する際に必要性を感じた環境保全対策や整備

性がある。また定期的に SUP 活動を行っている者が多く、自然環境の変化へのモニタリングや環境を管理する活動が期待できる。ただ指導者養成団体が行っている講習会等では、安全に対する指導は行われているが、環境配慮について単元が設けられていない実情にあり、講習内容に環境配慮に関する内容を加えるべきであろう。回答には、「環境の問題点に気づいてはいるが、行動に移せていない」といった記述もみられ、どのような活動をすれば環境問題の改善や保全につながるのか、具体的な活動内容が周知されていないと考える。環境省^{12,13)}は 2015 年と 2017 年に国立公園内で開催されるトレイルランニングのイベントに対するガイドラインとモニタリングの手引きを作成し、主催者及び実施者に対し、安全配慮や環境配慮などについて呼び掛けを行っているが、SUP においても明確な配慮行動を示すことで保全行動につながる可能性がある。インストラクターは快適で安全な実施についてはもちろんであるが、環境保全についても指導的立場にあるべきであり、インストラクターを養成する指導団体には SUP 実施者の環境に対する気づきや保全に対する取り組みを活動環境の整備や改善に生かしていく組織的なシステム作りが求められる。

V. まとめ

本研究において SUP 実施者の環境配慮行動を構成する因子として「自然環境」「地域環境」「働きかけ」が抽出された。指導者資格や指導団体の指導制度が構築されていく過程にあり、現段階では環境配慮行動について養成講習会では十分な指導が行われておらず、経験者から指導を受けた者が最も多かった。環境配慮行動を構成する因子として「自然環境」「地域環境」「働きかけ」が抽出され、環境配慮に関する知識と技能の入手先によって環境配慮行動の違いが見られた。また SUP 実施者は地域環境、自然環境に対する環境保全の対策や整備の必要性を感じていた。

SUP の活動が我が国に定着していくためには安全な実施はもちろんであるが、快適で、利便性の高い活動環境を構築していく必要がある。環境配慮行動および環境保全意識を促進するための方策として、まず SUP を始める際には専門店の SUP スクールが窓口となるよう

に資格制度を確立する。さらに SUP スクールなどでインストラクターが環境配慮、環境保全について指導を行うべきである。そのためにも、インストラクターを養成する立場にある指導団体には環境への配慮や行動、働きかけなどの具体的な活動内容のマニュアルや基準を作成し、配布やホームページ上で公開するなど組織的な取り組みやシステム作りをさらに推進する必要がある。

VI. 今後の課題

本研究ではインストラクター養成講習会参加者のみを対象者としたため、指導的な立場になることを目指していない愛好者とは活動配慮行動と保全意識が異なることが考えられる。また指導者になることを目指している対象者であったため、環境配慮行動や活動環境への意識が全体的に高く、対象者間の十分な比較検討を行えていないことが懸念される。

SUP の実施者がわが国で増加し始めたのは近年のことであり、SUP の活動環境に関する研究は十分な蓄積がなされていない。今後、SUP を実施することによる環境配慮行動や保全意識の変化は、SUP を実施する前後の環境に対する意識変化、他種目との効果の比較などを行うことで明らかにできると考える。また対象者の活動年数や専門志向化など参加の度合いによって環境配慮行動の違いを検証すべきであろう。

引用文献

- 1) 原田宗彦：スポーツ都市戦略 2020 年後を見すえたまちづくり。学芸出版社、東京、pp140-144, 2018.
- 2) 平野貴也：スタンドアップパドルボード(SUP) 愛好者の実状と普及のための課題。海洋人間学雑誌, 4(1):41-46, 2015.
- 3) 海上保安庁：ウォーターセーフティガイド。(2019 年 7 月 20 日：参照)
https://www6.kaiho.mlit.go.jp/info/marinesafety/00_totalsafety/02_sup/00_sup.html
- 4) 河合辰巳：アメリカにおけるスタンドアップパドルの発展と普及に関する研究。2013 年度早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士論文, 2013.
- 5) 平野貴也：スタンドアップパドルボード(SUP)の実施環境,活動満足度,行動意図の関連性について。名桜大学紀要, 23:43-49, 2018.
- 6) Pfahl ME: Sport & the natural environment a strategic guide. Kendall hunt publishing, Dubuque, Iowa, 2011.
- 7) 社団法人日本スタンドアップパドルボード協会：日本スタンドアップパドルボード協会公認ベーシックインストラクターテキスト第 3 版。社団法人日本スタンドアップパドルボード協会、神奈川, 2013.
- 8) 一般社団法人日本 SUP 指導者協会：日本 SUP (スタンドアップパドルボード) 指導者協会公認インストラクターテキスト第 1 版。一般社団法人日本 SUP 指導者協会、神奈川, 2018.
- 9) 武 正憲, 浜 泰一, 斎藤 馨：マウンテンバイクの自然環境における利用特性とライダーの環境保全意識に関する研究。ランドスケープ研究, 72(5):575-578, 2009.
- 10) 武 正憲：カヌー活動を事例とした野外レクリエーション活動家の環境保全意識と環境配慮行動の関係。ランドスケープ研究, 71(5):689-692, 2008.
- 11) Dyck C, Schneider I, Thompson M, Virden RJ.: Specialization among mountaineers and its relationship to environmental attitudes. J Park Rec Admin, 21(2):44-62, 2003.
- 12) 環境省 (2015) 国立公園内におけるトレイルランニング大会等の取扱いについて。(2019 年 7 月 20 日：参照)
http://www.env.go.jp/nature/trail_run/conf/trailrun_n.p.pdf
- 13) 環境省 (2017) 国立公園内で開催されるトレイルランニング大会等におけるモニタリングの手引き。(2019 年 7 月 21 日：参照)
https://www.env.go.jp/nature/trail_run/mat01.pdf

□研究資料□

無人島でのキャンプ体験が育む子供の成長

—事後感想文等を手がかりとしたケース・スタディ—

小森伸一¹¹ 東京学芸大学

海洋人間学雑誌, 9(1):17-30, 2020.

(受付: 2019年3月28日; 最終稿受理: 2020年5月14日)

キーワード: 生きる力, 海洋型キャンプ, 無人島, SEAS (School Events Analyzing System), ケース・スタディ

I. はじめに: 研究の背景および目的

本研究は海洋型組織キャンプである「チャレンジ! 無人島探検 in セとうち」の体験がもたらす子供たちの成長について、自己評価にもとづく SEAS 調査を参考にしつつ、子供の事後感想文を手がかりに明らかにすることを目的としたケース・スタディである。

研究対象のケースとなる「チャレンジ! 無人島探検 in セとうち」(以下、無人島キャンプ)は、森永製菓株式会社の CSR (Corporate Social Responsibility: 企業の社会的責任) 活動における青少年育成を目的とした「リトルエンゼル育成プログラム」として実施されている。本稿執筆時の 2018 (平成 30) 年度で 3 回目となる。その前身として 1999 から 2014 年の間に全 15 回行われた「森永リトルエンゼル育成 無人島探検隊」(2011 年度は東日本大震災の為に休止)^{注 1)}から数えるとその歴史は長い。本稿は、2017 (平成 29) 年度に実施された無人島キャンプの成果について取り上げていくものである。

「SEAS (シーズ)」(School Events Analyzing System: 学校行事評価システム)は、文部科学省の提唱する「生きる力」および国立教育政策研究所の策定する「特別行事活動評価基準」を融合して開発された尺度である。この SEAS 調査は、行事活動の中での体験によってもたらされる「生きる力」に関わる自己成長感を多角的に捉え、その体験活動における効果(活動への満足度、取り組みの姿勢、成長度、等)について自己評価をもとに検証する^{1, 2), 注 2)}。

「生きる力」は、(1) 確かな学力: 自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力、(2) 豊かな人間性: 自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など、(3) 健康・体力: たくましく生きるための健康や体力、と定義されている。1996 (平成 8) 年に、「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」という諮問に対する第 1 次答申の中で、中央教育審議会が教育の新たな目的として初めて示した。その背景には、青少年の多様な体験活動の欠落にともなう子供たちの健全な心身育成への弊害が顕在化してきたことにある。

これらを受けて、2002 (平成 14) 年度以降の学習指導要領の中で継続して強調されてきており、2011 (平成 23) 年度実施の現行学習指導要領(小学校)では、「生きる力」をよりいっそう育む方針が示され引き続き重視されている。「生きる力」を醸成する基盤として、直接的な体験活動の重要性も同時に強調されてきた。この点は他者との関わりにおいて進められる体験型の学習形態となる「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニングなど)の導入推奨を含めて、「生きる力」の育成は 2017 (平成 29) 年 3 月に公示された新学習指導要領でも重要事項として踏襲されている³⁾。

「SEAS」では、体験活動によって自分がどのくらい伸びたかという「生きる力」に関わる成長について、「知識・理解(情報収集・活用力)」、「思考・判断(問題解決的思考力)」、「豊かな人間性(コミュニケーション)」、「技能・表現(実行力・リーダーシップ)」、「関心・意欲・態度(モチベーション)」、「健康・体力(体力・気力)」という 6 つの側面から、自己評価にもとづいてより多面的に検証できるように構成されている。

組織キャンプにおける「生きる力」の効果検証においては、「IKR (IKiRu chikara) 評定用紙」を活用した研究が多くみられる(例えば、橋ら⁴⁾、中川ら⁵⁾、青木ら⁶⁾、比屋根・氏家⁷⁾、等)。それらの研究では、野外活動(自然体験活動)を含めた組織キャンプでの体験は子供の「生きる力」を向上することが示されてきた。本研究では、「生きる力」の検討において多用されている「IKR」ではなく「SEAS」調査を活用しているが、この尺度を用いて公表されている先行研究は数点である^{8, 9)}。その中で、とくに本稿は「SEAS」調査による子供たちの自己評価としての結果データをケース・スタディの中で取り上げた質的研究であり他に類をみない。そういった意味で本研究は、体験活動による「生きる力」に関わる子供の成長についてのこれまでの成果に、また違った観点からの知見の積み上げに寄与できるであろう。この点に本研究の新規性および意義を指摘できるものと考えられる。

なお、本研究の目的を遂行するにあたり、以下 2 点の研究論点(リサーチ・クエスション; 以下、RQ)を設定し、その RQ に基づいて検討していく。

- ① SEAS 調査(自己評価)にみる子供の成長について
- ② 上記 RQ1 との関連において、事後感想文等にてど

筆頭者連絡先: 〒187-0021 東京都小平市
e-mail: skomori@u-gakugei.ac.jp

う表現されているか

II. 方法：ケース・スタディ（事例研究）

ある特色ある状況・環境（ケース）について着目し、その事例の密な検証を通じてより広く深い当該事象の理解に適した研究方法として、質的研究の一手法となるケース・スタディ（事例研究）がある^{10,11)}。本研究は、無人島キャンプという非日常的な特殊なケースにおける様々な体験を通して生起される子供たちの心の動きや行為、また相互作用する事象全般の内容や経験する世界の意味（意味世界）について検討を試みるものである。Gillham¹²⁾によれば、そのようなある特別な環境におけるその独自の文脈の中で得られる根拠（データ）に基づきつつ、設定した研究課題について最も適切で可能な回答を導き出す手法の一つがケース・スタディであると述べられている。本稿では特殊な事例（無人島キャンプ）を研究対象として上掲した研究論点（RQ）についての検討を試みることから、ケース・スタディの手法が最も適切かつ妥当と判断し採択した。以下は、本研究における RQ の検証を進める上でのその事例内容および研究方法等の概要である。

1. 事例（ケース）の概要

A. 研究対象者とその背景

当該キャンプ参加者の小学生4年生から6年生の32名が研究対象者である（男子16名／女子16名）。その32名は全国921名の応募者の中から選考^{注3)}されたため、参加者のそれぞれが初対面であった。なお、応募にあたっては、無人島キャンプに参加したい理由及びしてみたいことを子供自身が手書きで書くことや、「厳しく、つらい状況でもあきらめず挑戦し、仲間と協力できる気持ちのある方」という条件が示されている¹³⁾。子供たちはそれらの点を了解した上で応募し選考されていることから、無人島での取り組みに対する意識や意欲は潜在的に高い傾向にあると察せられる（あくまでも推察であって精査されたわけではない）。

現地では1グループ8名（男子4名／女子4名）での全4班で編成された。班分けはキャンプ初日になされ、そのグループを中心に生活や活動が行われた。表1は学年および性別ごとにみた人数構成を示したものである。

表1. Configuration Table for the Subject of Research

	1班		2班		3班		4班	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
4年	1	1	1	2	2	1	1	1
5年	2	1	1	1	1	1	1	2
6年	1	2	2	1	1	2	2	1
計	4	4	4	4	4	4	4	4
	8		8		8		8	

B. 無人島キャンプの概要：日程・場所・活動プログラム、等

当該キャンプは2017（平成29）年8月1日（火）から6日（日）の5泊6日で実施された。当該無人島は瀬戸内に浮かぶ「松島」である（兵庫県姫路市）。この島を管轄する兵庫県立いへしま自然体験センターの5キロメートルほど南に位置する。このセンターは家島諸島の「西島」内に作られた海洋型の施設である。最初の2日間は現地の環境への心身の適応を考慮するとともに無人島生活に向けた準備を含めてセンター内のフィールドで活動し、無人島「松島」へは3日目に移動して3泊4日のキャンプ生活を送った。全6日間の活動プログラムの概略は表2の通りである。全日程を通じて、大きな天候の崩れはなく総じて良好で、表2に示されているプログラムが予定通りすべて実施された。

各班には男女1名ずつの2名のリーダー（班付き指導者）が配置され、キャンプディレクター、プログラム・マネジメントスタッフ、看護師、スーパーバイザー（筆者）など総勢24名からなる指導体制で運営された（筆者含む）。

2. 研究デザイン

A. 参加観察

筆者は当該無人島キャンプにスーパーバイザーの立場で帯同して参加観察を行い、そこで得られた子供たちの言動についての重要な発見や気づきについて、適宜フィールドノートとして記録した。参加観察には、観察対象となるフィールド（本稿でいえば、当該キャンプ全体）への関わりの程度によって4分類が考えられる。すでに、自分が参加者であるような立場で参与しながら観察する「完全な参与者」、たとえばグループのリーダーとして子供のサポートやアドバイスをするなどある明確な役割をもちながら参与する「積極的な参与者」、フィールドに入るものの積極的な役割は持たないで現場の日常的な流れを崩さないように観察する「消極的な参与者」、直接的な接触を一切もたない「観察者の役割のみ」である¹⁴⁾。筆者の役割は当該事業における事前・本番・事後と必要に応じて主催者や全体統括役のキャンプディレクターに助言をしたり、相談を受けたりする立場であった。子供たちに事前配布された資料には、筆者はスタッフの一人として紹介されている。それゆえ、当該キャンプの最初と最後の挨拶や日常会話をすることはあった。しかし、研究対象者の子供たちへの関わりにおいて特別な役割は担っておらず、直接的に関わって指導したり、指導に介入したりすることはなかった。したがって、参与の深さでは最も浅い「消極的な参与者」であった。

B. 収集データ（アーカイブ）

キャンプ終了後に、設問に対して5段階で回答するSEAS調査アンケートを実施した（表3）。体験後に子供たちが自身の成長（どうか変わったか）について、どう感じているか自己評価した結果の平均値である。回答した研究対象者は小学4年生から6年生までの男女半数ずつであることから（表1参照）、得られる数値には、各学年における発達段階の差や性差による違いがあると考えられる。しかし本稿では、後述する質的研究における「アーカイブ」の考えにもとづいて、それらの差を

表 2. The Outline of Activities

	1 日目	2 日目	3 日目	4 日目	5 日目	6 日目
	いえしま自然体験センター		無人島「松島」			
午前	東京組・出発式 名古屋組・出発式 姫路組・出発式	起床 (6:30) 朝の集い 朝食 (食堂) <u>無人島トレーニング</u> ・泳ぎ ・テント設置練習 ・班備品確認	起床 (6:30) 朝の集い 朝食 → 部屋清掃 センター発→無人島へ <無人島着> <u>オリエンテーション</u> <u>設営/避難訓練</u>	起床 (7:00) <u>班別活動 (午前)</u> ・朝食：パン食 ・泳ぎ ・釣り ・魚介類最終 ・島内探検 など	起床 (7:00) 朝食：飲料用ゼリー <u>個人選択活動</u> ・釣り ・泳ぎ ・缶ダ作り ・クラフト ・木登り ・塩づくり など	起床 (7:00) 朝食：パン食 <u>撤収</u> <u>離島式</u> 無人島発 → 姫路港
午後	全体集合/姫路駅 バス移動 船移動/姫路港 センター到着 <u>開始の会</u> /班発表 <u>班活動</u> ・自己紹介/名札作り	昼食 (食堂) <u>カヌー体験</u> <u>ビーチフラッグ</u> シャワー <u>班ミーティング</u>	昼食 (弁当) <u>ビーチクリーン</u> <u>島探検</u> ・反対側の浜へ <u>貝採集</u> シャワー (水浴び)	昼食：α米・缶詰 <u>班別活動 (午後)</u> ・泳ぎ ・釣り ・魚介類採集 ・島内探検 など シャワー (水浴び)	昼食：そうめん (本部炊き出し) <u>選択活動シャリング</u> シャワー (水浴び) 夕食 (野外調理) ・釣った魚+α米	入浴/銭湯・姫路 <u>姫路組とのお別れ会</u> 新幹線移動 (昼食) 名古屋組・解散式 東京組・解散式
夜間	夕食 (食堂) 入浴 <u>班ミーティング</u> 就寝 (20:00) (スタッフミーティング)	夕食 (食堂) 就寝 (19:00) (スタッフミーティング)	夕食 (野外調理) ・貝カレー <u>班ミーティング</u> 就寝 (20:00) (スタッフミーティング)	夕食 (野外調理) ・焼き魚定食 <u>班ミーティング</u> 就寝 (20:00) (スタッフミーティング)	<u>たき火の会</u> <u>班ミーティング</u> 就寝 (20:00) (スタッフミーティング)	

表 3. Questionnaire Contents of SEAS

【問1】この「チャレンジ！無人島探検隊」にあなたがどのように取り組んできたかについて、お聞きします。 1. 今回の無人島探検隊に、満足している 2. 今回の無人島探検隊にいっしょうけんめいに取り組んだ 3. 今回の無人島探検隊の計画や準備にいっしょうけんめいに取り組んだ 4. 今回の無人島探検隊の3日間、いっしょうけんめいに参加した 5. うまく行かないときもよく工夫して解決した 6. 班の仲間や、リーダーとうまく力を合わせる事ができた	15. グループで何かしているときに、そのときに一番良いやり方を考え、そのやり方通りにすることができるようになった 16. 学校だけでなくいろいろなところでのルールやマナーをみんなが守れるようになった 17. 目標のやり遂げるために、みんなをまとめることができるようになった 18. 班の仲間の意見をうまくまとめながら、活動を進められるようになった 19. 自分の考えや気持ちを、相手にうまく伝えられるようになった 20. 自分とは違う意見でも大切にできるようになった 21. 相手の気持ちになって考えることができるようになった
【問2】この「無人島探検隊」についてのあなたの感想をお聞きします。 1. この森と食の探検隊に参加したことで、森永製菓がより好きになった 2. この無人島探検隊は、森永製菓らしい、いい行事だと思った 3. この無人島探検隊には、他の会社にはない活動があると思った	22. これまでよりも話せる人が増えた 23. 相手の気持ちになって考えることができるようになった 24. 人の心の痛みが分かるようになった
【問3】この「チャレンジ！無人島探検隊」への取り組みを通して、あなたがどのようにかわったと思うか、お聞きします。 1. 「おもしろい」「もっと知りたい」と思うことが増えた 2. これからやってみたいと思う活動が増えた 3. 自分から進んで学ぼうと思う気持ちが強くなった 4. 勉強してみたいと思うことが増えた 5. どんなときでもねばり強くやってみようと思うようになった 6. なにごともすすんでやってみようと思(お)うようになった 7. 困ったことが起きたとき、その理由は何かを考える力がついた 8. 困ったことが起きたとき、どうすればよいかを考える力がついた 9. 困ったことが起きたとき、どうすればよいいろいろな解決のし方を考えることができるようになった 10. 活動をうまく進めるにはどんなことを良くすればよいか、考えられるようになった 11. 目標をやりとげるために必要なことを考え、計画を立てられるようになった 12. これまでしてきたことを見直して、次に何をすべきか考えられるようになった 13. みんなの意見が違ってても、話し合いながらみんなをまとめることができるようになった 14. 計画にそって仲間と活動を進め、グループの目標をやり遂げられるようになった	25. 知りたいことがある時、本・図鑑・辞典を使って調べられるようになった 26. 知りたいことがある時、パソコンやインターネットを使って調べられるようになった 27. 知りたいことがあるとき、周りの人にたずねながら情報を集められるようになった 28. 活動を通して、さまざまなことを知ることができた 29. 活動を通して、さまざまなことが分かるようになった 30. 調べたことや分かったことを、分かりやすく発表できるようになった 31. 活動を通して、体力や気力・集中力がついた 32. 体を動かしても疲れにくくなった 33. 何かに集中して取り組める力がついた 34. ストレス (大変なことを経験したり、そう感じたりすること) に対して強くなった 35. 元気がわいてくるように感じられるようになった 36. 生き生きとした感じがするようになった [自由記述欄] この「チャレンジ！無人島探検隊 in せとうち」の中で、気がついたこと、分かったこと、発見したこと、感動した(心が動かされた)こと、楽しく行ったとなど、とても思い出に残ったことについて、何でもご自由にお書きください。

【回答】「1. そう思わない」「2. あまりそう思わない」「3. どちらでもない」「4. ややそう思う」「5. そう思う」

精査して示すことはせず、学年や性別など全てを包括した上での平均値について取り上げることとする。

SEAS アンケートに加えて、主催者から「感想文 (A4 サイズ)」(図 1) と保護者および子供を対象とした自由記述式の「親子アンケート (A4 サイズ)」(図 2) の提出を依頼している。感想文については、文章だけでなく絵を描いてもよく、各自の好きなように自由に書いてよいことを伝えた。本研究のデータ源となるこれら 3 点については、迎えの保護者も交えての解散式の際に、回答時には保護者は決して干渉することなく、必ず子供自身で考えて答えることを強調した上で渡し、郵送によって回収した。SEAS アンケートと感想文は参加者 32 名から回答が得られたが、「親子アンケート」については、1 点の返送漏れがあった (5 年女子およびその保護者)。なお、親子アンケートでは、保護者については「お子さんを探検に行かせてよかったと感じた点はありませんか?」、「森永製菓に対するご意見、ご要望」という 2 点について聞いたが、本研究に関係するのは前者の質問のみであるため、本稿では後者の問いに対する記述内容については取り上げない。このほか、SEAS アンケート内に設けられた自由記述欄の記載内容、筆者の参加観察によって得られたフィールドノートも補助データとした。

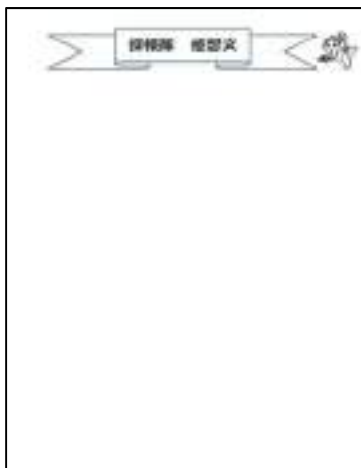


図 1. Essay Paper

図 2. Questionnaire for Parent and Child

これらはすべて、質的研究としての本研究における「リサーチ・クエスチョンに取り組んだり考えたりすることを可能にする、広範な材料のコレクション」¹⁵⁾ (注 4)を意味するアーカイブとして扱われる。SEAS の調査結果については数的データであるが、これもその一つとして捉える。すなわち、それは数値ではあるものの、高度な統計処理上の結果データ単体として取り上げているのではなく、質的調査の本研究全体において、主としてリサーチ・クエスチョンを探求する上で参考にする資料として扱われる性質のものである。

C. 分析手法

本研究では子供の成長度を自己評価にもとづく SEAS の結果を参考にしつつ、その成長度と子供の感想文等に見る記述データとの関係性を探るものである。調査協力者たちから得られた言葉の質的データは、無人島という特殊な環境下での協働生活や様々な体験活動をするといった社会文化的な文脈から生じられたものである。したがって、得られた質的データを研究対象者の単なる部分的な内面の表現として見るのではなく、その周囲の社会や文化的背景を考慮した文脈の中で捉え意味付けしていくディスコース分析の手法を取ることにした。その分析アプローチにはいくつかの手法があるが、その中でも本稿では、主観的経験を研究するディスコース分析を採用している。これは、その人にとって人生の一部で特別な意味をもち、振り返ることがあるような経験について、またそれが多くの人たちに共通する同じ種類の経験であるなら、語られ、記述される際に何等かのパターンがあると考えられるのであり、この経験の語りや記述パターンを検討していくアプローチである¹⁶⁾ (注 5)。本稿でも、子供たちが得た経験について語られている記述のパターンを見出し検討している。

D. 倫理的配慮

研究対象者となる子供たちの保護者に対して、「アンケートの依頼状」および「研究倫理遵守に関する誓約書 (研究承諾書)」の 2 点をアンケートに添えて事前に送付した。協力可能な場合は当該誓約書に承諾の署名をもらい返送してもらった (全員から承諾)。なお誓約書では、匿名性の担保や、事前事後のアンケート等で得られた調査データが研究に関わる著作や発表、講演・講義といったことに使用される一方で、そのような目的以外には使用しないことについて説明している。

III. 結果

1. SEAS 結果にみられる「子供の成長度」

SEAS 調査によって明らかになった「子供の成長度」の結果は図 3^{注 6)}のとおりである。一番高い平均値を示したのが「関心・意欲・態度 (モチベーション)」であった [4.65/5]。この指標は、活動や学びに積極的、自主的に取り組み、自己を成長させようとする力を示し、子供の学習面および学習以外の活動面についての「モチベーション」(興味・関心・意欲)の向上を示す指標である。次いで高い平均値となったのが、「健康・体力 (体力・気力)」であった [4.60/5]。この指標は、物事や活動に集中して取り組むことができる集中や体力および気力の充実度、またストレスに耐える力などの総合的



図3. The Result of SEAS: Child's Growth

な身体力・精神力の向上を示す指標となる。そして3番目が「豊かな人間性 (コミュニケーション)」である [4.53/5]。これは、自分の気持ちや考えを相手にうまく伝える自己表現力や他者への共感性とともに、相手の気持ちや考えにも耳を傾け尊重できる傾聴能力などの総合的なコミュニケーション力の向上を示す指標である。

次いで残りの3項目が、「技能・表現 (実行力・リーダーシップ)」および「知識・理解 (情報収集・活用力)」が同値で [4.51/5]、最後に「思考・判断 (問題解決的思考力)」ということになった [4.50/5]。「技能・表現」は、チームメンバーと協力しあって活動を進め目標を達成できるという実行力・リーダー的な力の向上を示す項目となる。また「知識・理解」は、必要な情報を多様な情報媒体を活用して必要な情報を集めて見つけ出し、理解し、適切にまとめて発表できる情報の検索・収集・発信力の向上を示す指標である。最後に「思考・判断」は、自ら課題を見つけ、多様な解決策を考え、問題解決に向けた計画を立てるといった総合的な課題解決的思考力の向上を示す項目である^{注7)}。

以上、「子供の成長度」は、6つの指標について全てが [4.5/5] 以上と高い平均値を示した。

2. 記述によるテキストデータ

A. 感想文

図4にみられるように、文字だけでなくイラストを交えての多様な表現による感想文が得られた。文字のみというものもあったが、絵だけというものはなかった。文字数 (文章量) については、概して絵が感想文用紙の多くのスペースを占めて文章量が少ないもの [例: 図4-① (5名: 4年男2・女2/5年女1)]、付されたイ

ラストが小さいが文章が多いもの [例: 図4-③ (7名: 4年男1/5年男2/6年男3・女1)]、イラストと文字が用紙の半々くらいのもの [例示なし (7名: 4年男1・女1/5年男1・女2/6年男1・女1)]、イラストが多く (大きく) 文字数も多いもの [例: 図4-⑤⑥ (4名: 4年女1/6年男1・女2)]、文字だけではあるが比較的文章量が多いもの [例: 図4-②④b (7名: 4年男2/5年男2・女1/6年男1・女1)]、などが主として見られた。文字数が少な目で (用紙の半分以下)、イラストもないといった感想文も少数あった [例: 図4-④a (2名: 5年男1/6年男1)]。

総じて、上位学年の方が文章量が多い傾向にあるものの、4年生であっても多くの文章からなる感想文を書いた子供もいた [例: 図4-②③ (4名: 4年男2・女2)]。複数枚で提出された比較的文章数の多いものが3点あった [例示なし (3名: 4年男1名・女1名/5年男1名)]。絵と文章が書かれた感想文は全体32点の内24点あり (4年8名: 男3・女5/5年7名: 男4・女3/6年9名: 男4・女5)、文字だけの感想文は8点であった (4年2名: 男2/5年3名: 男1・女2/6年3名: 男2・女1)。文章と絵が混在する感想文については、概して上位学年ほどその量と質ともに充実した内容となっている傾向が見られた [例: 図4-③⑤⑥ (11名: 4年男1・女1/5年男2/6年男4・女3)]。

B. 自由記述内容 (SEAS アンケート内)

前掲表3にあるように、SEAS調査では最後に自由記述欄が設定されている (記入スペース: 約縦4.5cm/横8cm)。「この『チャレンジ! 無人島探検隊 in せとうち』の中で、気がついたこと、分かったこと、発見したこと、感動した (心が動かされた) こと、楽しく行った



図4. Examples of Children's Impressions Essays

ことなど、とても思い出に残ったことについて、何でもご自由にお書きください」という問いに対して、研究対象者の子供 32 名のうち 30 名が回答し、2 名が無記入であった。図 5 はその例として全 4 グループ中の 1 班の子供たちの記述回答を示したものである。そこでも見られるように、1 文のみの短い回答もあれば、3 文以上で書かれたより多くの記述がなされたものもあった。全体的に見てそれらの差異については、学年や性別による違いは特に感じられなかった。当該図にあるような簡易な絵を添えていたものもあった（回答のあった 30 名中 3 名）。

C. 親子アンケート（自由記述式）

研究対象者 32 名中、1 点の返送漏れがあったため（5 年女子）、この親子アンケートについては 31 名分を分析対象とした。

(1) 子供の回答

前掲図 2 にあるように、子供への問いは A4 サイズ用紙の約上半分に 3 つの問いが設定されている（設問：「一番楽しかったことは？」「一番つらかったことは？」「探検で気がついたことは？」）。しかし、それぞれの回

答欄はとても限られた小さなスペースとなっているため、ほとんどが短い回答であった。それらを、学年および性別ごとに整理したものが表 4 である。

(2) 保護者の回答

本研究に関係する「お子さんを探検に行かせてよかったと感じた点がありますか？」という問いに対して、多様な反応があった。当該回答スペースに収まる数文（1～3 文）のものもあれば、「書ききれない場合は別紙でもかまいません」という但し書きが付記されていることから、別紙に記載された長文での回答も得られた。また別紙ではないものの、当該記述欄いっぱいにかかれていたり、用紙の裏側にわたって記述されたりするものもあった。その記述内容は、無人島キャンプからの帰宅後において、その体験を経ての子供の成長（行く前と帰ってきた後での言動における肯定的な変化）について書かれていることが多かった。特に長文での回答の全てにその傾向が見られた。紙幅の関係上、その全部をここに示すことはできないが、以下はそのような保護者からの記述例である。

・人や食べ物など、日常生活で当たり前にあるもの、してもらえていたことを考える機会になったようで、と

- いかだ作りで新しい浜を見つけたこと
- ①海にゴミがいっぱいあったこと ②フグが海にいた ③いかだ作りがたのしかった ④はじめて見た生き物がいた ⑤魚をさばくことができたが魚がかわいそうに感じた。
- 思い出に残ったことは、「ビーチクリーン」。北の浜も南の浜もひょうりゅう物でいっぱいだったけど、北の浜のゴミをみんなで拾ったらあつというまにきれいになって「ビーチクリーン」は大切でなと思った。
- 木登りやひょうり* [キャンプディレクターのニックネーム] の図かん作りなどの陸活動は暑かったけど楽しかったし、カヌーや海泳ぎも寒かったけど、楽しかったです!! 魚をさばいたり、貝の内蔵をとったりして命の大切さを感じました。
- 今までは店で売っている魚を何も思わずふつうに食べていたけど、無人島ではその魚のありがたみが分かり、自然の大切さがよく分かったからすごく良かった。一生わすれない思い出になった。仲間もできて友だちの輪が日本中に広がった。
- 電気などがほとんどない生活がどれだけ大変かという事に気が付いたし海からのひょうりゅう物やそれで無人島の浜が汚れたりしているからビーチクリーンとかも大切だけど海に物を捨てないことも大切だと思った。
- 人生の中でこんな経験をするのはたぶんもうないかもしれないぐらい多くのことを仲間と学べました。全てが感動でした。ありがとうございます。
- 心に残ったことは、ライス* [班リーダーのニックネーム] の顔は、米みたい。木登りしたこと。



* [] 内の斜字は、筆者の注記

図5. An Example of Children's Comments in SEAS : The Case of Group 1

表4. Children's Answers Part in the Questionnaire for Parent and Child

	一番楽しかったことは？	一番つらかったことは？	探検で気がついたことは？
4年	男子 魚を見れたこと（フグ、ブダイなど）／四メートルぐらいの深さの所で泳いだこと。／イカダづくり／魚釣り／釣り	トイレの水くみ／前と後に重いリュックをせおいながら歩いたこと／家でもにつもって山をのぼったこと／男リーダーという時／特にありません	海にゴミをすてている人がいた／つりで魚はかんたんにはつれないこと／自然、だれもない／自然であふれていてとても気持ちよかった／魚たちへの感謝など
4年	女子 なかまといっしょに泳いだりつりをしたこと／つり／イカダに乗って、森浜に行ったこと／木登り／海泳ぎ	むしさされやしおまけがいたい／なし／テントであつくあまりねれなかった／水が自分の思うりょう使えないこと。シャワーでシャンプーが無い！貝の内ぞう出し	水はききょうで大切だとわかった／水は大切／いまの生活がべんり／ビーチグラスが多かった／しげんをあまりムダにしてはいけない！ということ
5年	男子 いかだをつかったこと／ダイブ、つり／いかだ作り／きれいな海でおもいきり、泳いだこと／泳ぎ	トイレへはいること／ねるときに暑かった。トイレが遠かった／ごはん作り／電気や水道もなくて、暑かったこと／船に乗っていた時のこと	水や電気の大切さ／海の生き物から、命の大切さがわかった／地図ののっていない浜があったこと／見たことがない生き物や植物がいっぱいあったこと
5年	女子 友達がたくさんできたこと、海でとびこみをしたこと／はんのリーダーや仲間と過ごした時間／うにとり／釣り	トイレの水を運ぶこと／仲間との別れ／ふろに入れない／ウ二とり	自分でつった魚は最後までのごさず食べなければいけないということ／きちんとしたせつびがなくとも、生活できるということ／班できよりよくしたら、なんでもすばやくできる／食べ物や電気、水のありがたさ
6年	男子 個人せん択活動のイカダ作りです／水切り／海で泳いで魚を見たりできたことです／班のみんなや友達やスタッフさんといるとき／全部	ねるとき。すごく暑くてぜんぜんねれませんでした／テントがせまい／トイレが大変でした／クラゲなどのどくをもつ生き物／トイレ、テントでねる	日本に、こんなすごい自然があったんだと思いました。ふだんの生活がすごくめづまれていることに気が付きました／水は大切／今までの生活がとても恵まれていると感じました。ビーチでたくさんゴミが見つかりおどろきました／命の大切さ、自然の大切さ、友達の大切さ／無人島にはたくさんきれいな魚がいることを知った
6年	女子 みんなでやった全てのことが楽しかった！順位が決まらない！／海でウニやアワビサザエをとろうとしたこと／海で泳いだりつりをした事などやたき火の会／きれいな海で泳いだこと☆／カヌー・釣り／海やつりをしたこと／海で泳いで、いろいろな魚をみたこと	みんながいたからつらいことはなかった！／テントでねること／りとうしき／水浴び（セッケンがつかえなかったので常に自分の体がよごれているようで気持ち悪かったよ）③／大変だったことは、釣りや魚をさばくことですが、つらかったことは特にありません／水があまりないなかでペットボトルでのシャワー／つらい事は特になかったけど、魚があまりつれなくて、よるごはんに困ったこと	魚や貝も生きていて、大切な命だということ／人間は生きていくために命をもらっている／電気などがなくても生活できるし今の生活になれすぎて自然をこわすにもいけないから自然はもっと大切にしたいというところ／食べるって命をもらうこと。生きるって大変！／無人島で暮らすためには、「自然の恵み」を活用するだけでなく、守る、感謝することの両方が必要だと気がつきました／たくさんある／ま水がふそくして、手があまりあらえなかったから、水は生活をするうえですごく大切だということ

でも良い体験をしたんだなあとうれしく思います。(4年男子・保護者)

・見知らぬ土地で、見知らぬ人たちと6日間一緒に生活できたことはとても素晴らしい経験をさせて頂いたと思っております。生きるための知恵や行動力、仲間の大切さを学んだように感じます。家ではできない成長をさせて頂き、感謝しております。(5年男子・保護者)

IV. 考 察

1. RQ1・SEAS 調査（自己評価）にみる子供の成長について

SEAS にみる成長度は、pre-post モデルによる統計処理を使った検証ではないため、無人島キャンプの体験前後の変化、すなわち、体験によって子供たちの成長度が以前よりも高まった否かを示すものではないものの、自己評価において高い成長度が認められた。図3が示すように、体験後の子供たちを全体的に見ると、その時点で自らが成長したことを感じていることが見て取れる（自己成長に関わる設問〈表3・【問3】1~36〉について、子供たちが自己評価によって回答した結果の平均値を示したものが図3である）。

この傾向については、SEAS 調査における他の結果として示されている子供の「活性状態」（「満足度」および「取り組み姿勢」を掛け合わせてそのバランスから導き出す）がとても高いレベルにあることから指摘できる（図6）^{注8）}。「活性状態」とは、無人島キャンプの活動全般に一生懸命に取り組んだと子供自身が感じた上で満足感も得ているほど高くなる、またはその逆を知ることのできる指標である。いわば事後の子供たちの

ポジティブな心性状態の度合いを表している。

図6が示すように、子供たちは当該無人島キャンプについて、「全体的に熱心に取り組み [4.88/5]、かつ満足している [4.94/5]」という高活性領域の中でも非常に高い結果を示した。調査結果が示す体験後の子供の自己評価に見る成長度（平均値）は、この極めて高い活性状態の上に、またはそれと相まって導き出されたと考えられる。ここでの子供たちの高い満足感をもたらしている要因は、個々にそれぞれ違うであろう。一方で筆者の参加観察にもとづき概して言えるのは、子供たちは無人島でのさまざまな活動、遊び、チャレンジなどの体験を通して、自分自身で、また仲間と協働してやり遂げた時の達成感、喜び、感謝、楽しさ、感動などの情感や思いが複合的・総合的に重なりあって高い満足感に通じているのであろうと考えられる。さらに、一生懸命に自身で取り組んで最後までやったという、自主性や積極性に関わる肯定的な自意識も少なからずその高い充足感へ関連しつなっていると推察される。

加えて、先述したように、研究対象となっている子供たちは、無人島キャンプに対する意欲や意識が、顕在的かつ潜在的に高い傾向にあると推察され、その点が影響して、上記した「成長度」や「活性状態」についての高い値につながっているととも考えられる。

子供たちが生き生きと活動し前向きな気づきや気持ちになっている様子は、当該無人島キャンプの取り組み成果を発信するWEB ページ上に掲載された映像を通して確認可能である^{注9）}。当該事業では、7つの力の育成を目的に挙げているが^{注10）}、その項目ごとに映像が整理されて紹介されている（①挑戦する〈あきらめ

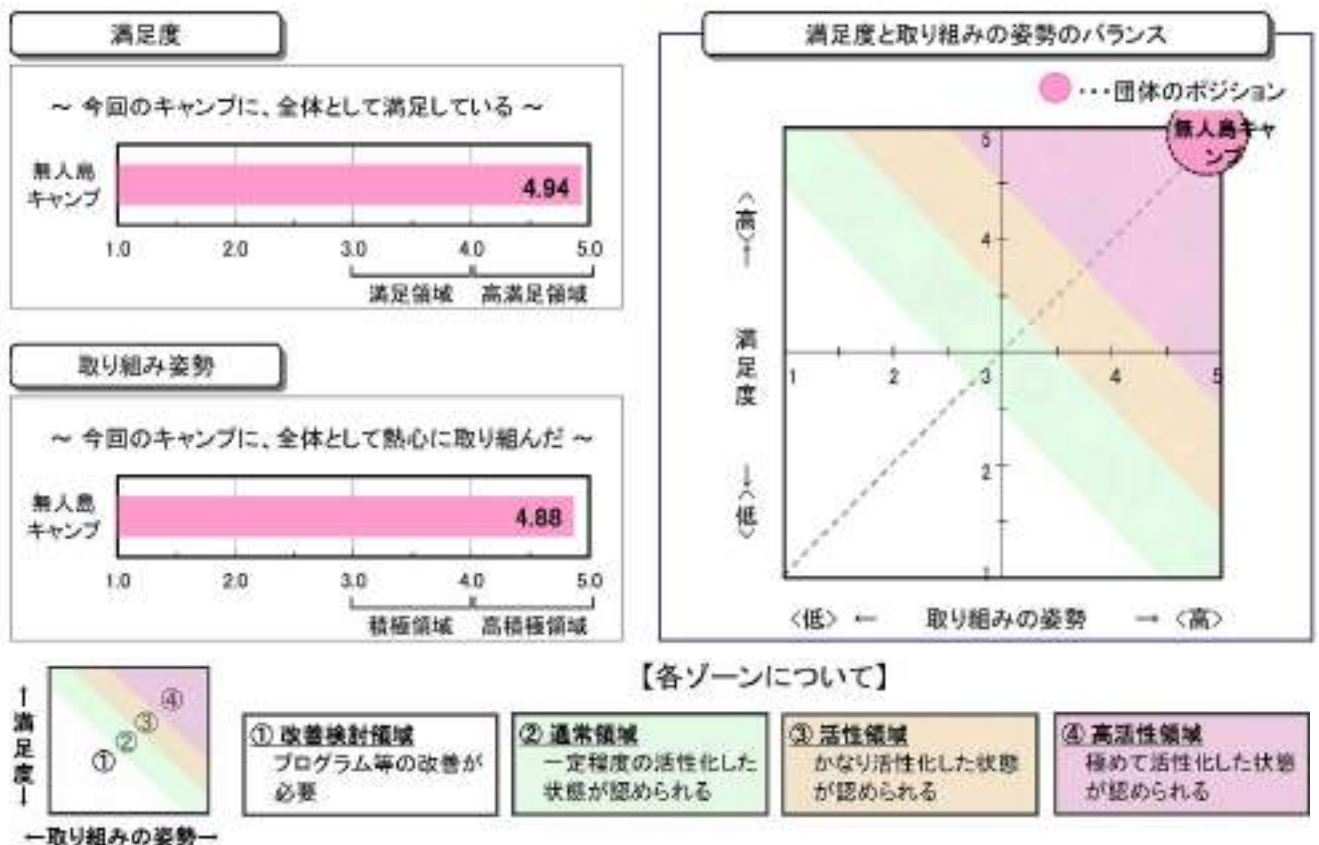


図6. The Balance of Child's Satisfaction and Working Stance

ない心・実践力>/②創る<発展的思考・実行力>/③自然と生きる<環境理解・自然下での生活力>/④協力する<周囲と協働する力>/⑤自分から行動する<自主性・積極的行動力>/⑥食べる<食についての知識・理解>/⑦身を守る<安全行動・対応力>; < >内の文言は現場の参加観察をふまえ筆者が補記)。

上記したような子供たちの快活な様子やそれがもたらすポジティブな心性状態が、生きる力に関わる子どもの成長指標の6項目での高い結果につながったと推察される。このことは、心理学者のFredricksonが提唱し、今やポジティブ心理学領域の基礎理論になっている「拡張-形成理論 (broaden-and-build theory)」からも説明できるであろう。拡張-形成理論における「拡張効果」とは、ヒトは喜び、興味、安らぎ、愛情、嗜好といったポジティブ感情を抱くことで思考と行動の選択の幅が拡大するという。いわば人間の視野を広げて思慮深くし、より発展的な状態となる機能を有するとされる。そしてポジティブ感情が認識や行動の幅を広げると、そのことにより創造的になるだけでなく、将来にわたって有効な身体能力、知的能力、社会的能力、心理的能力を生み出していくといった「形成効果」があるという理論である。この「拡張-形成理論」は脳神経科学分野も含む最新の実証実験や検証によって科学的根拠が示されているものでもある^{17,18)}。今回の無人島キャンプでは、表2に見られるようなさまざまなチャレンジ体験、遊びや協働生活の機会が多くあった。それらに意欲的に取り組みなどといった前向きで建設的な姿勢によってもたらされたポジティブな感情(達成感、楽しさ、喜び、感動、感謝、等)が、子供たちの知的、身体的、社会的、心理的能力の向上につながり、高い自己評価につながったと考えられる。なお、子供たちの生きる力に関わる成長度6指標を、「拡張-形成理論」が示す形成効果の4観点(知的・身体的・社会的・心理的)から整理し、当該事業が育成を目指す7つの力を対応させたものを表5として示した(項目の重複あり)。

2. RQ2 - RQ1 との関連において、どのような言葉(気持ち)で表現されているか

本項では、前項RQ1で見られた子供たちの活性化された発展的かつポジティブ状態や気持ちは、どのような言葉として具体的に表現されているのかについて、事後感想文での記述を軸に検討していく。その検証にあたっては、RQ1の成長度との関連から、子供たちがどのようなことに気づき、理解を深めたのかといった学びや成長の観点から見ていきたい。

子供たちの感想文を分析したところ、その記述の中に見られた子供たちの気づきや理解にはいくつかのまとまった観点やパターンが見い出された。1つは、自分たちで採集した貝や魚を自らさばいて食べたことや、無人島での限られた水の貴重さを体験したことから生じたと考えられる。「生きる上で他の生き物の命を感謝して残さず食べることや水を無駄にせず大切する」といった認識がうかがえた。このような食育に関わる気づきは、表4における「探検で気がついたことは？」に対する子供の回答でも多くの記述が見られた。2つ目に、色々なことを仲間と協働して生活したことで生じされた「他者と協力することやその仲間の大切さ」への気づきについての記述もよく見られた。3つ目に、無人島という独特な環境を体験したことにとともなう、その「自然やそこに生きる生物への美しさ、驚き、大切さ」といった感情についても多く綴られていた。4つ目に、無人島での非日常生活における不便で大変な環境がもたらす困難に対して、めげずに取り組んだ「チャレンジすること、充分に考えること、工夫することの大切さ」といった記述が多く見られた。

このような感想文の中で見られた子供たちの気づきや学びの様態は、親子アンケート(表4)内の「お子さんを探検に行かせてよかったと感じた点がありますか？」への回答において、帰宅後に保護者が感じ取った子供の成長について書かれた内容にも見て取れることが多々あった(例:「無人島という不便で過酷な環境で、

表5. Correspondence Table of Build Effects, “Child’s Growth” Index, and 7 Abilities Targeted in the Camping

形成効果 (拡張-形成理論)	SEAS「成長度」指標 (右欄の番号は、表3【問3】における対応する設問番号)	無人島キャンプが育成を目指す7つの力 (< >内の文言は現場を勘案した上で筆者が補記)
知的能力	● 知識・理解 (情報収集・活用力)	25~30 ○ 創る<発展的思考・実行力>
	● 思考・判断 (問題解決的思考力)	7~12 ○ 食べる<食についての知識・理解> ○ 自然と生きる<環境理解・自然下での生活力>
身体能力	● 健康・体力 (体力・気力)	31~36 ○ 身を守る<安全行動・対応力> ○ 挑戦する<あきらめない心・実践力> ○ 自然と生きる<環境理解・自然下での生活力>
社会的能力	● 豊かな人間性 (コミュニケーション)	19~24 ○ 協力する<周囲と協働する力>
	● 技能・表現 (実行力・リーダーシップ)	13~18 ○ 自分から行動する<自主性・積極的行動力>
心理的能力	● 関心・意欲・態度 (モチベーション)	1~6 ○ 自分から行動する<自主性・積極的行動力>
	● 思考・判断 (問題解決的思考力)	7~12 ○ 挑戦する<あきらめない心・実践力>
	● 豊かな人間性 (コミュニケーション)	19~24 ○ 協力する<周囲と協働する力>

娘は精神的な強さと、自然と向き合う心、仲間と助け合う心を身に付けてきたと帰宅した娘を見て感じます」／4年女子・保護者）。

以下、上述した4つの要素ごとに、感想文中に表出された子供たちの記述例を示しつつ、その時に子供たちが置かれていた生活や活動上の背景や文脈をふまえて考察していきたい。なお、【感：】内の数字は、感想文中において例示した子供も含めて他についても同様な記述が見られた総数を示している。また（S記：|子ア：）の「S記」の数字はSEAS調査内の自由記述欄について、一方、「子ア」の数は親子アンケート（表4）中の子供への設問「探検で気がついたことは？」で得られた回答について、当該項目に関する記述が見られた際の総数を表すものである。＜保ア：＞内の数字は親子アンケートにおける保護者の回答の中で当該項目に関する記述の総数を示す。

A. 「命をいただくことやその食べ物・水の大切さという食育」に関わる気づきや気持ち【感：11】／（S記：5 | 子ア：14）／＜保ア：9＞

筆者の参加観察を含めしつつ、どのような言葉として具体的に表現されているのかについて検討したところ、子供たちに最も大きな影響を及ぼしていたと感じられたのが、「命をいただくことやその食べ物・水の大切さ」に関わる気づきや気持ちを表している点であった。無人島生活では、全ての食事ではないが、島で採集した貝や釣った魚を子供たち自らがさばいて野外調理を行う。この無人島プログラムでは、食育の観点から自分たちが食するものは可能な限り自分たちで準備することを重視しているからである（育成を目指す7つの力の内の1つ「食べる」）。また、単に食事作りを行うのではなく、とくに魚をさばく時や食事開始の前には、「命のお話し」がなされる。それは、私たちが生きるためにする食事は、実は他の生き物の命をいただくことによって、それが生命の源であるエネルギーとなって私たちの命がつながっているといった話である。子供たちは、自分たちが生きるための食事に必要な材料を苦労して捕獲し、その生きた状態の生き物を自らが一から調理し口にする。そうすることで、ただ話を聞いたのみで終わらず、実際に「命をいただいている」ことを感じている様子が筆者の参加観察で感じられた。この点に関わる子供の記述例としては、以下のようなものがある。

・私は無人島で人生初の魚さばきをしました。魚はピチピチしているのでさばくのがかわいそうでした。だから、せっかくだらした命を最後まで食べようと思いました。（中略）。…行く前は魚をきれいに食べきれなかったけど、命をいただく大切さがわかり、今ではすみずみまで食べています。（4年女子）

・ぼくはこの無人島探検でとても大事なことを学びました。それは命の大切さです。そのことを強く感じたのは貝の内臓を取り出す時です。貝のおなかをおして内臓を取り出すという作業なのですが、それはかなりのグロテスクなものでした。ですがぼくはこの時、このようなことを思いました。もし自分が貝ならどう思うだろう。ぼくはこう考えました。「内臓をとられていやだけど、とられたならおいしく食べてほしいな。」なのでありがたくいただきました。（6年男子）

普段の生活では、子供たちは学校の給食も含めて、すでに作られた出来上がりを食べるのがほとんどであろう。調理のお手伝いをする子供も当然いるであろうが、それでも使われる材料は、魚や肉でいえば切り身といった既にさばかれた全体の一部であり、生きた状態のものを最初から料理をするのは稀であろう。それゆえ、無人島での「自ら採集したものを自らさばいてそれを食するという一連のプロセス」や、その体験を強化する「命のお話し」は、子供の心に非常に強い印象を与え、それが感想文で表現されるに至っていると考えられる。

次に、「一番大変だったのは、トイレの水くみです。でもこの経験をしたからこそ水の大切さを学びました」

（5年女子）という記述にも見られるように、子供たちの「水」に対する意識も散見された。無人島には当然水道はないため、水の使用は非常に限られる。それゆえ、水も食べ物と同様に命の源であること、その限られた水を大切に使うことについて、無人島生活を始めるにあたっては全員で共有される。日常では蛇口をひねれば何の制限や疑いもなく使えていた水も、無人島ではそうはいかないのである。何よりも、子供たち自身がその「限りある水」を体験・実感したことが、普段であれば当たり前にある「水」の大切さや有限であることの気づきを高めたのだと思われる。この子供たちの水についての意識の向上は、感想文自体にはそれほど記述がされておらず、むしろ親子アンケート中の子供および保護者のコメントに記述されていた【感：1】／（S記：3 | 子ア：6）／＜保ア：7＞】。

命をいただくことや水の大切さに関する子供の気づきについて、保護者アンケートでは以下のような記述があった。

・（前略）限られた水がどんなに大切に無駄にできないか、自然の厳しさ、命の尊さなど探検で感じた自分の想いや経験について生き生きとした表情で、後から後からあふれ出る言葉で語ってくれました。特に生きた魚をさばいたり、ドライバーで岩から貝を引き剥がして食べたり、クラゲに刺されたりといった生き物とのふれあいはとても心に残ったようです。（4年女子・保護者）

B. 「仲間との絆や協力・協調」に関わる気づきや気持ち（大切さ・楽しさ・嬉しさ、等）【感：19】／（S記：7 | 子ア：2）／＜保ア：15＞

この点については2側面から捉えられた。一つは「初対面でも活動を通して絆を深め仲良くなることでいい友達・仲間になれた（また、そのことが良かった・嬉しかった）」という点である—(1)。もう一つは「大変なことや1人ではできないことでも、仲間同士思いやりながら協力することのできるようになる（だから、生きる上で協働することや他者への配慮は大切）」といったことである—(2)。これらに関する表現は多くの子供の記述に見られていた。以下は、そのいくつかの例となる。(1)について【感：15】／（S記：4 | 子ア：4）／＜保ア：14＞

・魚つりはさいしょはぜんぜんつれませんでした。ラストたいむに一びきだけつれました。（中略）。けれどもぼくはそれよりいいことは、仲間ができたことです。話があったりいっしょにあそんだりしていい仲間ができたと思っています。（4年男子）

・はじめて会った者同士でしたが、大変なこともキツかったこともお互い協力しあって最高の仲間になりました！！ 苦手なことは助けてもらいました。(6年男子)
 (2)について【感：8】／(S記：3 | 子ア：1)／<保ア：5>

・今回無人島で分かったことがいくつかあります。(中略)。二つ目は、みんなで協力することの大切さです。ぼくはみんなで協力することが大切なことは、わかっていただけれどいつもの生活の中では1人でできることが多いので、無人島で、一人ではできないことがたくさんあることが分かりました。(4年男子)

・一番大変だったのは、トイレの水くみで、2班ずつ行き1回目はとても大変だったけれど、2回目はとても楽しくみんなで協力しあってできたのでとてもよかったです。(6年女子)

日常と比較して何の設備もない無人島生活は、不便で何をするにも普段より時間がかかり大変なことが多い。一方で、そのような環境ではすべてのことを1人でこなすことは難しいものの、仲間とともに考え工夫しながらやってみる多くの機会にもなり得る。さまざまな活動や生活をする上で目の前に現れる課題(困難)を解決したり成し遂げたりするために、他者と試行錯誤をしつつ協働する姿がよく見受けられた(筆者・参加観察)。そして、そのような他者と調和し、かつ協力することの大切さについて子供自身が認識し、その理解につながっていると思われる。

この点に関しては、保護者のアンケート回答において、「何より、仲間とのきずなが生まれた事、自然の中で仲間と協力して過ごした事が、彼の中で一番、忘れがたい、大切な思い出となった様です」(5年男子・保護者)などといった記述からも見て取れる。

C. 「自然環境や生物・植物」に関わる気づきや気持ち(美しさ・楽しさ・大切さ・環境意識、等)【感：19】／(S記：14 | 子ア：23)／<保ア：9>

この観点に関わる子供の記述には、2つの側面が見られた。一つは、無人島の自然の美しさやその自然美への感銘といった印象や、その自然や生物と触れ合うことの楽しさなどといった認識である—(1)。そしてもう一つは、無人島での活動を通じて生起された自然や資源を大切にす、無駄にしない、守るといった保全・保護などの意識である—(2)。子供たちの感想文には、それぞれの点について次のような記述が見られた。

(1)について【感：19】／(S記：11 | 子ア：10)／<保ア：7>

・無人島についた時、私が初めに思ったのは「海がきれい!!!」ということでした。無人島の海は、いつも見る海よりも、はるかにきれいでした。(4年女子)

・夜の暗さも思っていた以上でした。そばにいる、友達の表情も見えないくらいでした。そのかわり、星は空いっぱい広がっていて、すごかったです。(5年男子)

(2)について【感：7】／(S記：5 | 子ア：13)／<保ア：12>

・ぼくは無人島で知らなかったことをいっぱい学べました。例えば、自然の大切さ、友達の大切さとか、今まであまり気にかけていなかったことに気づいて、これからは無人島で学んだことを生かしていきたいと思いました。

・1番心に残ったことは、「ビーチクリーン」です。浜はひょうりゅう物でよごれていたけど、みんなで協力してゴミ拾いをしたら、すぐに浜はきれいになってとてもきもちよかったです。このけいけんをふだんの生活にもいかして、まわりのゴミを拾ったり、自分が出したゴミじゃなくても気づいたら拾おうと思いました。

(5年女子)

無人島という特異な環境ゆえに、そこで体験した自然は自分にとってのより特別な思いのある場所となっていた様子が随所に見られた(筆者・参加観察)。また、食料確保のための釣りや貝採集をしたことで、無人島に生息する動植物により関心や目を向けることになっていたのだと思われる。だからこそ、その思い入れの強くなった無人島で出会った自然やそこに生息する生物・植物の美しさや関わることの楽しさ、嬉しさが強く心に残り、それが言葉として表現されたのであろう。そして、そのような自然への好感が、自然を大切に思う意識にもつながっていると考えられる。

加えて、記述例にもあるように、「ビーチクリーン」によって、子供たちが浜辺に漂着する多くのゴミの不自然さに気づいたり考えたりするといった記述も見られていた。そのような環境に関わる気づきは、すでに述べた「A.『命をいただくことやその食べ物・水の大切さという食育』に関わる気づきや気持ち」において示した「水」についての記述にも見て取れる。さらに、電気、物などの「資源」の大切さや有難さといった記述からも環境への意識がうかがえる。

この点に関わる保護者のアンケート回答においては次のようなものが挙げられる。

・美しい自然やいい仲間の存在というとても大切なことに気づくことができたのだと思います。また『魚や貝やウニがよく見えるすごくきれいな海なのにペットボトルなどのゴミの漂流物が多かった。何で?』という疑問や、生きていく為に他の生き物を食べることの有り難さにも気付かせてもらえたこと、とても嬉しく思っています。(5年男子・保護者)

・戻ってきてから節電や節水を急に気にするようになり電気を消し忘れてしまうと逆にしかられるようになりました。(5年男子・保護者)

D. 「課題(困難)に対して考え工夫し、チャレンジしてやり遂げること」に関わる気づきや気持ち(積極性・実行力、達成力、等)【感：14】／(S記：3 | 子ア：3)／<保ア：10>

子供たちが直面した課題に対してあきらめることなく、自らおよび仲間と共に協働しつつ試行錯誤しながらチャレンジしてやり遂げている様子が多く見られた(筆者・参加観察)。そして、その体験から何かを学びとり成長した様子については、次のような記述がある。

・高い所に関することは全部「ムリ!」と決めつけていたけど、今では無人島でできたので苦手なことにもチャレンジしようと思っています。(4年女子)

・無人島のトイレは自分でバケツに入った水でながさなければならなかったから水は使えなくなるから水をはこぶのにバケツリレーで運んだらとてもつかれにくかった。電気もなにもなかったら自分たちでよりやりやすい方法などを見つかりしてやると考える力が身に付くからいいと思った。「無人島探検隊 in せとう

ち」に参加できてとても楽しかったけど、とてもたいへんだったからとてもいいいけいけんをできたからこそこれからもおぼえていたいと思えたしいやな事があった時に思い出したいなと思いました。(6年女子)

・最後に一生わすれない大切にしようと思う言葉があります。それは、(中略)「大変とは大きく変わるチャンス」。いつもより不便で大変な無人島探検で、家族に甘えていた僕も大きく変わったと思います。(6年男子)

無人島での生活では、衣食住に関わるさまざまな活動は日常生活に比べてとても制限が多くて不便であり、それゆえ様々な大変さがともなう。しかし、そのようなより“無い・少ない”環境の中で子供たちによく見られていたのは、個人そして仲間と協力してチャレンジし、その困難を乗り越えやり遂げたという大小数々の成功体験をしている姿であった(筆者・参加観察)。すなわち、無人島での“不便・大変・無い”生活環境は、子供たちにとっては決して否定的な空間を意味するのではなく、むしろ工夫・協働・チャレンジの場を生み出す発展的で創造的な空間となっていると言えよう。そして、そこからもたらされる「～をやり遂げた」という達成感や「～をできるようになった(自己効力感)」といった自己成長の自覚および自信が心に深く刻まれ、「苦手なことにもチャレンジしようと思っています」、「家族に甘えていた僕も大きく変わったと思います」といった言葉に表れているのだと推察される。

なお、ここでの論旨に関係する保護者のアンケート回答では次のような記述が見られた。

・強くなったと思ったのは、『無人島ではね、迷ってる余裕とかないの、水がなくても、貝が固くて取れなくても、魚が暴れても、トイレが臭くても、バケツリレーが大変でも、とりあえずやるしかない、前に進むしかないんだよ!』という言葉でした。何も無い環境では人はこんなに強くなれるのかと正直びっくりいたしました。(4年女子・保護者)

・今までは背を向けていたことに対して、『やってみよう』『きっとできる!』と前向きにチャレンジできるようになりました(6年女子・保護者)

以上4つの観点(A~D)から、子供たちが得たポジティブな気づきや学びについて、感想文中で見られた記述をふまえて考察した。加えて、その4区分には当てはまらないものの、また記述数も少ないが、無人島という特殊な環境だからこそより生起されたであろう子供の気づきについて付言しておきたい。それは、「無人島生活の中で、きちんとしたせつびはなくても、トイレもシャワーも料理もできるから、今の生活はとてもぜいたくだったんだと感じました(5年生・女子)とあるように、自分の普段の生活が実はとても便利で恵まれていることや、またそのことへの有り難さを感じているといった、いわば「日常生活への気づき」の点である【【感:2】／(S記:2|子ア:3)／<保ア:4>】。このような認識も、無人島での普段と比較してより“無い・少ない”生活を体験したことで、当たり前となつて気づくことのなかった、日常でのより“有る”ことに目を向けることになったのであろう。そしてその気づきが、日常において恵まれていることへの感謝や有難さの思いにつながっていると考えられる。

このように、上述したAからDの4つの要素に見られるような子供たちの肯定的な認識や理解が総じて、

先のSEAS調査での自己評価上において全体として高い結果(平均値)につながっていると考えられる。しかし本稿では、そのAからDの4観点(無人島体験によってより深められた子供たちの気づきや理解)がSEAS・6指標の結果とどのように関連しているについては、紙幅の関係もあってここでは精査していない。その点については、今後における課題としたい。

V. まとめ：得られた知見の要旨及び今後の課題

本研究は海洋型の無人島キャンプ体験がもたらす子供たちの成長について、自己評価にもとづくSEAS調査を参考にしつつ、子供の事後感想文を手がかりに明らかにすることを目的としたケース・スタディであった。設定した2点のRQについて導き出された知見の要旨は次の通りである。

A. RQ1: SEAS調査(自己評価)にみる子供の成長度について

・SEAS調査の「子供の成長度」を示す「① 関心・意欲・態度(モチベーション)」、「② 思考・判断(問題解決的・思考)」、「③ 技能・表現(実行力・リーダーシップ)」、「④ 豊かな人間性(コミュニケーション)」、「⑤ 知能・理解(情報収集・活用力)」、「⑥ 健康・体力(体力・気力)」の6指標における数値(全体での自己評価における平均)は、全項目が[4.5/5]以上となる、全体として高い平均値を示した。(図3)。

・子供たちは無人島でのさまざまな体験において、積極的な気持ちで快活に行動するといったよりポジティブ(前向き・発展的)な状態となり、その結果、自らの成長についての高い自己評価へとつながっていることが示唆された。

B. RQ2: RQ1との関連において、事後感想文にてどう表現されているか

・子供たちの感想文を分析したところ、子供の成長の向上の要因と考えられたポジティブな気づきや理解、気持ちとして、主として次の4要素が見い出された: (1)「命をいただくことやその食べ物・水の大切さという食育」に関わる気づきや気持ち、(2)「仲間との絆や協力・協調」に関わる気づきや気持ち(大切さ・楽しさ・嬉しさ、等)、(3)「自然環境や生物・植物」に関わる気づきや気持ち(美しさ・楽しさ・大切さ・環境意識、等)、(4)「課題(困難)に対して考え工夫し、チャレンジしてやり遂げること」に関わる気づきや気持ち(積極性・実行力、達成力、等)。

・上記4観点以外にも、記述数は限られていたものの、無人島という特殊な環境での活動だからこそ生起された認識として「日常生活への気づき」(感謝・有難さ、等)の点も見い出せた。

・以上に見られるような結果は、無人島の自然から調達した食材(貝・魚)を自らさばき料理して食するという活動や、普段と比べてより“無い・少ない”、不便で大変な環境での生活や活動が、むしろ子供たちの工夫・協働・チャレンジを生み出す発展的で創造的な場となっていることでもたらされていると推察された。

本研究は「生きる力」に関わる子供の成長度を見るのにSEAS調査を参考にしたが、これは事後のみの自己評価にもとづく単純集計から得られた結果(平均値)を

アーカイブ (RQ を探求するための資料) として用いたものだった。「生きる力」の測定にあたっては、pre-post モデルで有意差検討する IKR 評定調査から得られる量的データを加えつつ、質と量のミックス・メソッドにおいて検証することも有意義であろう。そうすることで、無人島キャンプ体験によって育まれる子供の成長といった、いわば教育効果についてより妥当性や精度の高い知見の創出につながると考えられる。

注 記

- 1) 『星ふる島とぼくの夏』(監修・小森伸一)に詳しい。「森永リトルエンゼル育成 無人島探検隊」を主催してきた森永製菓株式会社および森永乳業株式会社によって作成された記念誌で 2013 年に発行された (非売品)。この本は、東京都内および政令指定都市のすべての小学校の図書室に献本された。
- 2) 国立大学法人東京学芸大学および JTB 法人東京との産学連携研究において開発された。SEAS はとくに学校行事に焦点をおき、元々中学生以上を対象に作成されているが、行事活動は一種の体験活動であると捉えられるため、質問内容の文言を発達段階に応じて工夫し適宜修正を施すことで、学校外でのさまざまな体験活動の取り組みや、小学生も対象と実施可能である (引用文献 8) を参照)。実施された当該アンケートは SEAS 事務局によって分析されその結果が各団体に報告される形式をとる。
- 3) 選出にあたっては、真夏の時期に無人島でキャンプ生活をするにあたっての健康上の点や、選出後に連絡を取る際に問題がないように応募書類上に不備がないかなどについて確認される。なお、当該キャンプへの応募者の積極的参加意思や適性 (過去の経験、性格、親の理解度、等) などの視点が判断基準となることはない。
- 4) アーカイブには、ドキュメントにもとづくもの、聴覚や視覚に基礎をおくもの、鍵となる研究論文、自身のメモ (含、フィールドノート)、その他、分析を手助けし得るあらゆることが含まれる (引用文献 15) を参照)。
- 5) ディスコース分析は、社会構成主義 (現実社会的につくられるとする考え方) に基づき、大きくは「談話分析」「フォーコー派ディスコース」「批判的ディスコース」「ディスコース心理学」のアプローチがあるとされる。ディスコース分析は、社会構成主義をふまえ、人と人のやり取りにおいて現れる経験の客観的な側面を研究してきた一方で、その反面、当人にとっての主観的経験や意味はあまり扱われてこなかったという反省が指摘されている。そのような課題をふまえ、とくに「ディスコース心理学」におけるアプローチにおいて、ヴィトゲンシュタイン (Wittgenstein, L.) の「言語ゲーム」理論に基づき、人間の主観的経験が形成される過程を考察し、社会構成主義の立場に立ったまま主観的な経験にアプローチするという新たな流れが出てきた。「言語ゲーム」の考え方をふまえることによって、人間の主観的経験がどのように形成されるかを検討すると、ここで言う経験は、人の人生の一部であり、その人によって特別な意味をもち、何度もふり返ることがあるような経験と捉えることができる。そして、そのような経験が多くの人たちに共通する同じ種類の経験であるなら、語られ、記述される際にいくつかのパターンがあると考えられるのであり、この経験の語りや記述パターンを発見す

ることが、主観的経験の研究の目的とされる。本稿は、この主観的経験を研究するディスコース分析の考え方及び方法に沿うものである。

- 6) 図 3 には、「(1): 改善検討領域 (2 未満)」「(2): 通常領域 (2~3)」「(3): 効果的領域 (3~3.5)」「(4): 高効果領域 (3.5 以上)」の 4 領域が示されている。これらに見られる数値範囲は、SEAS 開発時の予備調査・本調査を通して得られた回答分布をふまえて設定された。しかし、SEAS 調査の信頼性及び妥当性について検証された公表論文はないため、ここでは「参考」として提示している。
- 7) 当該 6 指標の項目内容については、上注 2) において示した SEAS 事務局が作成する結果レポートの中で説明がされている。
- 8) 満足度は当該行事や事業の全体的な成功度を示すおおまかな指標となりえるが、この指標を単独で用いる場合には限界がある。異なる集団において同程度の満足度が示されたとしても、一生懸命に活動に取り組んだ集団と、そうでない集団とではその意味することが異なるからである。それゆえ、満足度とその背後にある取り組みプロセスを掛け合わせることで、「一生懸命に取り組みつづ満足もしている」や「あまり一生懸命には取り組まなかったが満足はしている」などといったより実態に沿った解釈が可能になる。
- 9) 当該映像は、動画共有サービスの YouTube にて鑑賞可能である。当該 WEB サイトにて「森永製菓 無人島探検 in せとうち 2017」で検索することによって育成目的に掲げる 7 つの力ごとの動画をリストアップできる (2019 年 10 月 18 日現在)。
- 10) 当該事業の WEB ページ内「森永リトルエンゼル育成プログラム チャレンジ! 無人島探検隊 in せとうちとは?」(<https://www.morinaga.com/mujin/about/>) にて提示されている (2019 年 10 月 18 日現在)。

引用文献

- 1) 杉森信吉, 福井里江, 林尚示: PE-045 中学校・高等学校の学校行事が「生きる力」をどう高めるか? (その 1) 一学校行事評価システム (SEAS) の開発一, 日本教育心理学会第 54 回総会発表論文集: 526, 2012.
- 2) 杉森信吉, 福井里江, 林尚示: PE-046 中学校・高等学校の学校行事が「生きる力」をどう高めるか? (その 2) 一学校行事評価システム (SEAS) の開発一, 日本教育心理学会第 54 回総会発表論文集: 527, 2012.
- 3) 文部科学省: 富学習指導要領『生きる力』: 新学習指導要領 (平成 29 年 3 月公示) / 学習指導要領のポイント等/改訂のポイント (2019 年 10 月 18 日: 参照) http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384662.htm
- 4) 橘直隆, 平野吉直, 関根章文: 長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響. 野外教育研究, 6(2):45-56, 2003.
- 5) 中川もも, 岡村泰斗, 黒澤毅, 荒木恵理, 米山絵理: 長期・短期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響. 野外教育研究, 8(2):31-43, 2005.
- 6) 青木康太郎, 福田芳則, 谷健二, 下地隆, 小松由美: 水辺活動におけるウォーターワイズプログラムが児童の生きる力に及ぼす効果. 野外教育研究, 8(2):13-22, 2005.

- 7) 比屋根哲, 氏家彰子: 定期的な野外活動が子供の「生きる力」に及ぼす影響. 野外教育研究, 13(1):63-70, 2009.
- 8) 杉森信吉, 福井里江, 林尚示, 古屋真, 彦坂秀樹: PE-047 小学校の学校行事が「生きる力」をどう高めるか? —学校行事評価システム(SEAS)を活用した児童の視点からの効果評価—. 日本教育心理学会第54回総会発表論文集: 528, 2012.
- 9) 小森伸一, 小池太: 組織キャンプ『森と食の探検隊』の体験が育む子供への教育的効果とは—「SEAS」調査を活用したフィールドスタディにおいて—. 環境教育学研究, 27: 3-37, 2018.
- 10) Rossman GB and Rallis SF: Learning in the field —An introduction to qualitative research—. SAGE Publications, CA:104, 2003.
- 11) 松本孚, 森田夏実: わかりやすいケーススタディの進め方—研究テーマの設定からレポート作成のポイントまで—. 照林社, 東京, p16, 2001.
- 12) Gillham B: Case study: Research methods. Continuum, New York:114, 2008.
- 13) 公募ガイドホームページ「森永製菓『チャレンジ! 無人島探検隊 in セとうち』冒険隊員募集!」(2019年10月18日: 参照)
<https://www.koubo.co.jp/contest/nonsection/event/031994.html>
- 14) 箕浦康子: フィールドワークの技法と実際. ミネルヴァ書房, 東京, pp38-39, 1999.
- 15) ティム・ラプリー (著), 大橋靖史, 中坪太久郎, 綾城初穂 (訳): 会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析 (SAGE 質的研究キット 7). 新曜社, 東京, p193, 2018.
- 16) 鈴木聡志, 大橋靖史, 能智正博 (編): ディスコースの心理学—質的研究の新たな可能性のために. ミネルヴァ書房, 東京, pp3-51, 2015.
- 17) Fredrickson BL: The role of positive emotions in positive psychology: The broaden-and-build theory of positive emotions. Am Psychol, 56(3):218-226, 2001.
- 18) Fredrickson B: Positivity: Top-notch research reveals the 3-to-1 ratio that will change your life. Three Rivers Press, NY:15-36, 2009.